
竜のダンジョン B F 2 9 何でも屋

C K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜のダンジョンBF29 何でも屋

【Nコード】

N2783DJ

【作者名】

CK

【あらすじ】

竜のダンジョン地下にある不思議なお店。

そこはダンジョン内とは思えないほど、品揃えがよく、環境がよかった。

何でも屋らしくいろんな物を取り扱っているが、不思議なものばかり。

一体この店は何なのか。訪れる客たちに驚きを与えながら、今日も元気に営業中。

地下にあるお店

場所は竜のダンジョン、地下29階層、とある一角にあるひっそりとしたお店。

木の木目が入ったドアの真ん中には赤く輝く宝石がはめられ、金属でできた取

手にはプラスチックでできた板が提げられている。

その板がひっくり返され、今日もその店は開くのだ。

竜のダンジョンBF29 何でも屋 OPEN!

竜のダンジョンがある街、ポートルレイルは今日も朝から賑わっていた。

ダンジョンへと続く道には商店が居並び、人がごった返している。

武器屋、宿屋、ギルド、酒屋、薬屋、主にこれらの店がひしめき合うが、どの店も同じと言う訳ではない。

どこもかしこも、新規の客を掴むためにキャッチーな商品を作り、常連をとどめるために品質を保つ努力を怠ることは出来ない。

怠ってもいいが、その先は廃業という道が待ち受ける。

竜のダンジョンがもたらすめぐみは、もはやこの街には欠かせないものとなっている。

いや、この国にとって欠かせないと言ってもいい。

この街から国の各地へと物が運ばれることを考えれば、王都ではな

いにしる、間違いなく国で一番大切な街である。

去るもの追わず、来るもの拒まずのこの街では、日々新しい人々の流入がある。

しかし、入りきらない皿からあふれた者たちは、拒まれずともはじき出されるほかない。

華やかなこのポートルレイルの街にも、スラムと呼ばれる場所があった。

そんな華やかで、影があり、実力次第ではどこまでも登り詰められるこの街を人々は夢の都市と呼ぶ。

夢の都市ポートルレイル、その中でも一際実力がものを言う場所がある。

ギルドと呼ばれる場所だ。

あらくれ者、スラム出身者、庶民、貴族、果ては人間でない種族まで、誰でも腕に覚えがあるものはそこに集う。

いろんなものが混ざり合うと、何かが起こる。面白いことが。

この物語も、ギルドから始まる。

ポートルレイルは土地こそ広大ではないが、人の多さから大都市と言い表されることがよくある。

なんとといっても、住人が一つの街に10万も詰め込まれているのだ。これを狭いとはなかなか言える人物はいないだろう。

その大都市ポートルレイルで今最もアツく、名を急激に広げているパーティーがある。

パーティー名を『リレイン』と名乗る、4人組の集団だ。

皆18歳と若く、活気に満ち、出自も悪くない。

初めて竜のダンジョンに行つて以来、数多くの成果を持ち帰った。

約1年で20階層まで踏破したスピードは、前例のないもので、誰

もが彼らの力に期待した。

金のある貴族や大商人は、いち早く彼らを囲おうとした。

しかし、二つ返事で断られる。

その情報が出回ってから、またリレインの人気は街を駆け巡った。

若き才能に、皆が注目している。

娯楽が人の数に供給が行き届いていないこの街では、こういった話は一番の酒のさかなだった。

その話題の中心にいる彼らは、今現在酒場『猫ネコ』で打ち合わせ中である。

「俺たちが冒険者デビューして、もうすぐ一年。今日は皆に言っておきたいことがある」

酒がとどき、皆が一口飲んだのを確認して、リーダーのアヴァイトが言った。

真剣な顔にほか三人が少し硬直する。

緑色の目に見つめられた三人はその口が開くのを待ち続ける。内容はおそらく察しがついているが。

「竜のダンジョン、30階層を目指そうと思う」

予想通りの言葉が皆の耳に入る。リーダーの決意は固いようで、言い終わった後も顔は引き締まっている。

「俺は賛成だぜ」

陽気に答えたのが、ジョッキを片手に持った体躯のいい男、剣士のバーダーである。

短髪に切りそろえた爽やかな顔で、ニコリとアヴァイトに同意する。

「私も賛成よ」

こちらは華奢女性。ローブを見にまとい、椅子の傍には寄り添うように杖が置かれている、典型的な魔法使いだ。回復魔法、攻撃魔法、なんでもござれの優等生メレイだ。

リーダーを合わせて賛成が三票、多数決なら決まりだが、最後の一人の回答を皆が待ち続けた。

誰も催促はしない。それがこのパーティーのルールだ。

しばらく時間を置き、最後の男が口を開いた。

「俺も賛成だ。だが、条件がある」

男の名前はタチイ。弓職で、長身、動体視力が優れており、とっさの判断も早い。このパーティーのバランスである。

「条件とは？」

「皆知っているだろうけど、30層からは魔物の強さが跳ね上がる。もちろん、手前の20層後半も手ごわいだろう」

「それも考慮しての決断だ」

「ああ、しかし俺たちはまだまだ経験が浅い。もしもの時に対処が遅れることが心配なんだ。だから25層より下では、予定外のこと起きたらすぐに引き返すこと。これが俺の条件だ」

タチイからの提案を吟味するリーダーのアヴアイト。

慎重さは大事だが、それに重きをおいては進歩が大幅に遅れる。

それがかえって自分たちに危ない目を見せることもある。

しかし……。

「それでいい。リーダー、メレイ、それでいいか？」

アヴアイトは即断即決した。

「ああ、いいとも」

「うん」

あとの二人も同意する。ここら辺は、アヴアイトへの信頼感がなせる業だ。

話はまとまった。

日時は早速明日から。

場所はもちろん竜のダンジョン。

彼らは優秀だ。優秀すぎる。

それ故に、たった一年で竜のダンジョンを20層まで踏破した。

しかし、彼らはまだ知らない。進化し続ける竜のダンジョンの恐ろしさに。

多くの優秀な冒険者たちを飲み込んだ、地下100層まである竜のダンジョンの本当の恐ろしさを知るものは少ない。

優秀故に、あらゆることを想定できる。

すぐに対処もできる。

でも、全く考えもしないようなことが起こると、彼らは多くの冒険者同様、そのダンジョンに飲み込まれることになるだろう。

地下30層とはそういう場所であり、そしてその手前にはそんな不幸な彼らを救う場所がある。

そこにたどり着けるかどうかは、彼らの運しだいだ。

と言っても、この30階層の壁は毎年数組があつさりと乗り越える。跳ね返されるパーティーは海のごとしだが、数が数なだけに通り抜ける数も山のごとしだ。

未だに100層まで踏破したものはいないが、平均的なパーティーが大体生涯最深で30層近くまで降りてゆく。

50層まで降りていける冒険者は生活に困ることはないだろう。引退した後も貯蓄で暮らしていけるほどだ。

故に皆がそのラインを目指すが、大体が30層で跳ね返される。

そこで心が折れるもの、めげずに挑み続ける者、命を落とすもの、それぞれ違った道がある。

レインのメンバーたちもそのことを知っている。

だからこそその一大決心だ。
可能なことなら、一発で通り抜けておきたい関門。
最深部を目指す彼らが躓いていい場所ではない。
それでも、彼らに油断は全くない。

次の日、早朝からリレインは動き出していた。

いつも通りの定刻の朝食。

何度も確認する荷物。

命を預ける仲間の顔をしっかりと見て、彼らは竜のダンジョンへと潜っていった。

ダンジョンは基本的に薄暗い。

しかし、明かりが必要になるくらい暗くはなく、人間の目でもしっかりと見ることができる。

気をつけなくてはいけないことは、死角からの急襲。

彼らほどの実力があれば、いまさらそんな初歩的なミスも犯さないのだが。

道中は順調だった。

けが人もなく、消費物の量も計算通り。

予定がただしければ、二日で30層まで辿り着ける。順調故に歓喜はあったが、気が緩むことはない。その固さこそが彼らの強みでもある。

竜のダンジョンBF10、この階層からはダンジョンの名に違わぬ、竜種が出現する。

もちろん彼らも知っていることだ。

「竜が来るぞ」

アヴァイトの警戒に皆が身構える。

広いダンジョンの一室で、石竜が今にもとびかかってきそうな勢いで吠え出す。

破裂音が延々続くような轟音に、思わず4人とも耳を塞ぐ。

熟練の冒険者たちは耳栓をあらかじめつけたりするが、若い彼らには気の回らないところだった。

石竜がその雄たけびを終えると同時に、両者が突進を開始した。

5メートルはある石竜の正面突進を受け止めるのは、大剣使いのバーダーの仕事だ。

動きが止まったところで、初手を繰り出すのがアヴァイト。

魔法を剣に帯びさせて、首筋に一閃。

石でできた鱗が剥がれ落ち、竜の皮膚にまで達する。

激痛でもがき苦しむ竜からバーダーがはなれ、今度は後衛の二人が仕事を始める。

目を狙った正確な矢が飛んできて、直後体を包む大炎が飛んでくる。弓使いタチイと、魔法使いメレイの仕事である。

彼らはこの単純化された連携をもって、ものの10分で石竜を狩った。

同年代でこれだけできるのは、間違いなく彼らを除いて他にいない。

「みんな、よくやった。最小限の採取で、先を急ごう」

そう彼らの今回の目的は、地下30層の赤竜であり、それ以外の荷物はなるべく増やしたくなかった。だからせつかく狩った石竜も高価な魔石と、牙くらいしか採取しない。

残ったものは幸運な冒険者たちのものだ。

その日は15層の一角で疲れをいやし、彼らの冒険は二日目に入る。

二日目も初日同様に順調の一言。
慎重を期してなかなか踏み込んでいなかった領域だったが、既にこのランク魔物をものともしなかった。

10層以降に出てくる鉄竜、鋼竜を難無く狩っていくうちに、彼らの自信はより高まる。

次第に、辿り着けるのか？という疑問が必ずできるといふ確信へと変わっていった。

そして、彼らの運命の審判となるBF29にたどり着いた。

もうすぐ目的地の地下30層。

胸が高鳴らないわけがない、しかしリーダーのアヴァイトをはじめ、誰一人油断はしていなかった。

「何かいる」

先の部屋にただならぬ存在を感じ、アヴァイトは警戒の色を示す。感じているのはアヴァイトだけじゃない。全員がこの先にいる化け物の存在を感じていた。

薄暗い通路を通り抜け、広い空間へと出る。

いた、赤竜がそこに。

10メートルを超す巨体で、赤い鱗から熱を放っている。

人間たちの存在に気が付くと、すぐさま雄叫びを上げ、突進した。

「いつもの通りだ！敵が強力だからって気圧されるな！これは俺たちが乗り越える壁だ！」

アヴァイトの指示通り、いや指示がなくとも皆が己の仕事をこなす。最善の一手で、いつものように竜の体力を徐々に削る。

鱗がはがれていき、竜の血が散る。

勝負は見えた。間違いなく冒険者たちの勝ちだった。そして時間が経ち、竜は足元から崩れ落ちた。もう息はしていない。

「勝った、勝ったぞ！」

思わず興奮の声を上げたのは、大剣使いのバーダーだ。それにつられて、ボロボロの三人も喜ぶ。

しかし、そんな歓喜もつかの間、自分たちが通ってきた通路から、うごうと荒い音が聞こえてくる。

壁を少し破壊しながら現れたのは、もう一頭の赤流だった。

さっきの赤竜よりだいぶ小さい。

その分動きは速く、地面を駆けて後方にいた弓使いのタチイを攻撃した。

爪がしっかりと片腕にえぐりこまれる。

切れが良すぎて、骨まで避けたため獲物を引きずりこむことには失敗した。

それでも重傷だ。あとは三人。

「メレイ、タチイの治療を！俺とバーダーでこいつを食い止める！」
レインのメンバーに焦りはなかった。

こういった緊急の事態も常に想定している。

アヴァイトと、バーダーが時間を稼いでいる間にメレイが怪我を完治させる。

それに今回の赤竜は、先ほどのものより小さい。その分力も弱かった。

これなら俺と、バーダーだけで勝てる、アヴァイトの心にはそんな考えがあった。

（背中に青い筋？）

一瞬見かけた変わった筋、しかしすぐに考えることをやめ戦いに集中した。

結果はアヴァイトの考え通りになった。

メレイが治療を終える頃に、アヴァイトとバーダーが件の赤竜を狩ってしまった。

簡単な仕事ではなかったが、ギアマックスの彼らが手におえない相手でもなかった。

「場所を移して休憩をとろう。俺たちの力が通じるのは証明された。自信をもって進もう」

思わぬ連戦になってしまったが、それでもなんとか乗り越えた。

ダンジョン内には魔物が近づきたがらない一角がある。

場所の特定は難しいが、事前に得た情報で既にその場所の目途は立っていた。

目標は30層だが、既に赤竜を2頭狩っている。

半分目標は達せられている状況だったので、なんとか一度心を落ち着かせたくて彼らは休みの場へと急いだ。

そして、道中でタチイが倒れる。

「えっ！？タチイ？」

すぐにメレイが気づいて、その体を支える。

顔が青ざめており、意識も朦朧としていた。

「どこで毒にやられた!？」

「わからない！同じ物しか食べていないはずなのに！」

「解毒魔法を頼む。タチイは俺が支える」

指示通りにメレイが解毒魔法をかける。即効性のある魔法だが、タチイの状況は変わらない。

「なぜだ、なぜ良くない」

「わからない。解毒魔法は効いているはずなのに」
リーダーのアヴァイトは頭を抱えた。
魔法が効かない。

解毒草をかじらせても効果がない。
一体どこで罹ったのか、見当もつかない。

さらに悪いことに、彼らの背中を追うようにもう一頭の赤竜が現れる。

「最悪だな。バーダー、タチイを担いで逃げる。メレイが先導、殿は俺だ」

悪いことが次々に起こると、人は頭が回らなくなる。

特に今まで苦い経験の少ない彼らには、この状況は最悪と言ってよかった。

原因不明の病に、背を追う赤竜。

それだけじゃない、前に立ちふさがる魔物もちよくちよく出た。

しかもこんな時に限って、厄介な魔物ばかりが。

1時間ほど逃げ回った。

既にメレイの魔力が尽き果て、バーダーも走る体力がない。

殿を務めたアヴァイトはもつと重傷だ。

それでも一番危ないのはタチイだった。今にも息を引き取りそうなほど、その生命力が弱まっている。

今すぐに治療してやりたいが、今は逃げるしかない。

休める場所がなくては、まともに考えることすらつらい状況だ。

走って走って走り回って、もう自分たちの場所も何もかもがわからなくなってきたころ、彼らはそれを目にした。

竜のダンジョンBF29 何でも屋、と書かれた看板が立っ

る。

ダンジョン内にはあまりにも不自然な人工的扉が見える。

看板にはOPENと書かれており、どうやら客を招いているようだ。扉の中央にある赤い魔石のようなものがあり、ものすごく怪しげだ。しかし、その赤い石に惹きつけられる。

もしかしたら、自分たちは魔物が作り出した幻でも見ているのかもしれない。

だからか、無性にあの場所に入ってみたくなくなった。

他に行く場所もない。もう逃げ回る体力も気力もなかった。

扉を恐る恐る開けたのは、リーダーのアヴァイトだ。

ゆっくりと開かれたその部屋の中は、ダンジョン内とは全く違う世界が広がっていた。

ドアから漏れ出す、冷たい空気。

ダンジョン内のじめじめした、過ごしにくい環境とは全くの別世界。それに強い光が目をさす。地下にあるはずのダンジョンで一体どうしてこんな強い光を発することができるのか。

まだ開ききっていない扉だけで、すでに彼らは頭のをあふれさせるほどの衝撃を受けていた。

「あつ、いらつしやいませ」

扉をくぐった先には、見たことのない変わった椅子に座った青年がいた。

木でできたカウンター越しに、ゆったりと椅子に座している。その視線は先ほどまで四角い二つ折りの何かに注がれていたようだ。

牛の皮でできた素材だろうか？背もたれがあり、手を置くスペースもあるゆったりとしたイス。どこかソファーにも似ていると思った。

「ここは一体……」

「何でも屋です」

帰ってきたのは、シンプルな答えだった。店主はイスに乗りながら滑らかに滑って、カウンターに腕を乗せた。魔法だろうか？

こんなの……、ただの何でも屋なわけがない。

壁にはいろんな商品が展示されている。これだけの品ぞろえがあれば、何でも屋と名乗れるだろうが、その目に入ってくるものはどれもかしくも知らない物ばかりだった。

例えば、この部屋を照らす天井にある魔法器具と思われるもの。

こんなに強いひらりを放つものなら、間違いなくかなり高価なものだ。それなのに盗難防止の柵などがはられていない。

ここがまっとうな商店ならそんな不用心なことはしないはずだ。

いや、そもそもが可笑しい。

ここは竜のダンジョン地下29階層だ。店があること自体がおかしすぎる。

(やはり幻の類だろうか?)

「お連れのお客様、具合が悪いようですが？」

店主の男の声で、アヴァイトが冷静になった。

この店の詮索をしている場合じゃないことを思い出した。

そうだ、自分たちが最優先すべきはタチイの治療。今にも死にそうな仲間の助命こそがやるべきことだ。

「仲間が原因不明の病で倒れた。なにか助力していただけないか」
必死な頼みであった。

店主はそれを聞いて、カウンター内から出てくる。

タチイの額に手を当て、体も隅々まで調べる。

アヴァイトたちはただ黙ってそれを見守るしかなかった。

「あー、もしかして赤竜の攻撃くりました？」

その質問に、アヴァイトはタッチイが急襲を受けたのを思い出した。

「ああ、爪で腕をえぐられた。しかし、治療は施している」

「赤竜の毒が抜けきっていないですね。それが原因でしょう」

「バカな！？赤竜に毒だと！？」

アヴァイトは激昂した。この適当なことを言う男に。

見れば服装もおかしなものを着ている。黒髪黒目で、みためも怪しい。

一瞬でもこのような者を頼ろうとした自分を恥じた。

赤竜に毒がないことなど、冒険者の常識。この男は嘘をついて、ただ儲けることを考えているのだと思った。

だから激昂した。

「ふざけないでいただきたい……」

「その赤竜、せなかに青い筋入っていないかったですか？」

その言葉にアヴァイトはまた記憶をさぐる。

確かにあった。不思議だと思ったが、戦闘中故に対して気にはしなかった部分だ。

「……あった。確かに青い筋を見た」

「俺も見たぞ」

バーダーも見たらしく、言葉を発した。

「そいつが最近出てきた突然変種。ポートルレイルじゃまだ広まっていない情報みたいだね。その赤竜の亜種は変わった毒をもっているね。解毒魔法じゃ毒を消しきれないんだ」

「どうすればいい？」

さっきまで疑っていたのに、正確な情報を掴んでいるこの男にまた頼りたくなった。

「うちで解毒薬を取り扱っている。すぐに持ってくるから待ってい

てください」

そう言つて、不思議な男はカウンターの中に戻り、扉を一枚潜り抜けて店の奥へと消えていった。

ガタガタと音がして、扉があき、男が戻ってくる。

手には透明な容器に入った、液体がある。

「はい、これが赤竜亜種の毒に効く薬ですよ」

「すまない。助かる」

アヴァイトは受け取るや否や、ふたを開けタチイに飲ませる。

「即効性の薬だからすぐに良くなるだろう」

それが本当かどうかは、タチイの様子を見て見ないとわからない。

10分ほどがたち、店主の言う通りタチイの状態が快方へと向かった。

意識を取り戻し、視線をアヴァイトに向けるタチイ。

「俺は、生きているのか？」

「ああ、生きているぞ」

「ここは、すずしくて居心地がいいな」

弱弱しい声だが、タチイは素直な気持ちで口にした。

「ああ、不思議な場所に迷い込んだんだ。店主が助けてくれた」

「ありがとう、あなたは命の恩人だ」

視線を店主にむけ、タチイが言った。

「いいえ、私は商品を買っただけですから。それと今の薬結構高いですけど、大丈夫ですか？」

大丈夫ですか？とあとで聞かれても、どうしようもない。

アヴァイトたちはうなずくほかなかった。

仲間の命が助かったのだ、それ以上に価値のあることなどない。

「あれは調合が難しいですからね。高いんですけど、130,000

0ゴールドいただきます」
意表を突かれた。

アヴァイトはどれだけ吹っ掛けられるのかと思っていたが、これだけ効きがよく、しかも新種の薬だ。
てつきり数百万請求されるものと思っていた。

「それでいいのか？その程度なら……」
今になって、自分たちが現金を所持していないことを思い出した。
それもそうだ、ダンジョンに潜るのに金が必要になるとは思っても
いなかった。
それが普通の考えだ。

「すまない、金を持ち合わせていない。その代りだが、私の盾を置いていく。物もいいが、魔石が埋め込まれているので相当な金になるはずだ。間違いなく100万は下らない」
店主は黙って盾を受け取る。
明かりに照らして、盾を隅々までよく観察している。

「ほう、炎耐性の魔石が埋められているね。確かにこれなら100万は下らないだろう。よし、対価はこれでいいですよ」
店主から了承を得た。

これで、自分たちは合法的に仲間を助けられたわけだ。

それにしても、この怪しげな店主。

盾の価値をしっており、埋められた魔石まで知っていた。
てつきり、変な格好と、全く知らないばかりの商品を扱っているため、異界の住人ではないのかと疑ったがそうではないようだ。

市場の価値を知っているということは、やはり彼もポートルレルの住民だろうか？

しかし、先ほどはポートルレルをよその土地のように話しました。

(いったい彼はなにものなのか？)

「紹介が遅くなった、私はアヴァイト。冒険者グループ、リレインのリーダーを務めている。この度は助けていただいたいて本当に感謝している」

「いえいえ、私は商品を買っただけですから。私の名前は、タケル。この何でも屋の店主をしております」

店主と握手をかわした。

その手はさらさらしており、女性のようにか細い。間違いなくダンジョンを行き来できる強者の手ではない。もちろん魔法使いの手とも違う。

アヴァイトは一挙手一投足で相手を探ろうとしていた。

「あまり探らないでください。私はただの商人ですよ」

バレていた。それでもただの商人で通じるほど、アヴァイトの目は曇っていない。

「仲間が随分と疲れている様子ですね。よかつたら、休憩スペースをご利用ください。水と書物がありますので、好きに使ってください」

そう言つて、手で指示したのはカウンターの左側にあるスペース。ソファアールと足の短いテーブルが置かれている場所だ。今いる場所とは違い、すこし明るさが抑えられている。

「厚意に感謝する。タチイを寝かせよう」

まずはタチイをソファアールで横にした。

長方形のテーブルの形に合わせるように四方をソファアールが囲んでいる。

長いソファアールをタチイに、余ったソファアールに他の三人が座る。

店主はカウンターの奥へと消えていった。

アヴァイトはここぞとばかりに辺りを観察する。部屋の不自然な涼しさは何だ、なぜ湿り気がない。それに天井にある、パタパタとまわるなぞの物体。あれが優しい風をくれているようだが、涼しい原因ではないだろう。この休憩室と呼ばれる場所にも、明かりを発するものがある。盗られないような対策が一切施されていない。こここの明かりが少し暗いのは、リラックスしてもらったためだろうか？ソファアの生地は牛の皮だろうか？加工のレベルが高すぎる。よく見れば部屋の壁も作りのレベルが高い。ここは、本当に幻が作り上げた世界ではないのか……。

ソファアに腰かけると、そんなことまで頭が回るようになってきた。「なあ、アヴァイト。水は自由に飲んでいいんだよな？」バーダーがアヴァイトに確認する。バーダーの視線は、部屋の隅にある巨大な容器を捕えていた。

容器の中は間違いなく水だ。あの透明な容器は魔法で作ったのかだろうか？
メレイに視線を向けると、頭を横にぶんぶんと振った。わからないという意味だ。

三人ともこの空間に戸惑うしかなかった。ただ疲れて眠っているタチイがなんだか羨ましい。

「あれ？みなさん、水飲んでないですね。随分お疲れの様子なのに」「いや、すまない。勝手に飲んでいいものかどうかかわからなくて」戻ってきた店主にそう説明した。
本当にわからないのは、あの容器からどうやって水を取り出すかと言っただ。

店主は手に皿を持っていた。その皿から湯気が出ている、料理が乗っているのだろう。

「これ、多く対価を貰ったので。好きに食べてくださいね」

差し出されたのは、茶色い液体に、白い粒がたくさん入った料理。

一体何を食わせるつもりだ……。

全員が顔を見合わせた。

店主はその間に、ウォーターサーバーから水を注ぎ、紙コップを目の前に置いていく。

（しまった！？水を出すところを見ていなかった。あとこのコップはどこにあった！？）

アヴァイトの汗が止まらない。

訳の分からないことばかりが起きていた。

「タチイさんも起きたら、追加のカレー持ってきますね」

店主はまたカウンターへと戻っていった。

頭に何かをのせ耳を塞ぎ、一心に四角い二つ折りの箱を眺めていた。

店主がそれに集中してこちらに意識が向いていないことを確認し、バーダーが口を開く。

「こんな下品なもの食えるか」

一番おなかの空いていそうな男が言った。

確かに下品だ。品性のかけらもない。誰が見ても、アレ、を想像させる食べ物。

しかし、ここまで良くしてくれた店主が今さら自分たちをバカにするとも思えなかった。

まずは水を口に運ぶ。

澄んだ、混じりけのない味だった。まるで今しがた井戸から汲んできたかのように冷たい。

「うまいぞ、この水うまい」
すぐさまバーダーとメレイも口に運ぶ。皆一様に喉が渴いていたのだ。

冷たい水がのどを潤わせる。
もう一杯欲しい。

バーダーがウォーターサーバーへと近づく。

紙コップを握りつぶさないように、片手で持ち、透明なボトルに力ツカツぶつける。

「とおれねーな」

「そのやり方だと、手が濡れる。もちろんコップもだ。店主の手は濡れていなかったぞ」

アヴァイトも立ち上がり、ウォーターサーバーへと近づく。

蛇口のようなものをすぐに発見した。

その近くに、紙コップがたくさん重なった場所も見つける。リーダーの観察力高い。

「おそらくこの蛇口から出すのだろう」

しかし、ひねるものも、押すボタンもない。

とりあえず、一旦紙コップを蛇口の下に置くと、とたんに水が注がれる。

「なっ!?!」

一同混乱!!

店主が操作したのかと思ったが、相変わらず四角い箱を眺めている。

「どうやら自動で出てくらしい。高度な魔法技術じゃないか」

水を飲むだけで一苦労だ。

しかし要領は得た。三人はそれからウォーターサーバーの水を半分も飲み干した。

「ここは不思議な場所だな。魔物も来ないし、美味しい水もある。しかも店主は料理を出してくれる優しい人だ」

アヴァイトがようやく得た安堵のなかで、感想を漏らした。

「俺はこの料理も食べてみようと思う。実はさっきから香ばしい香りが俺の鼻をつつついて、もう腹が限界だ」

「実は俺もだ。しかし、否定から入ってしまったためなかなか言い出せなかった」

「私もよ」

メレイも同じ気持ちのようだ。

三人は同時にカレーを口に運んだ。

同じ感想を抱いたのだろう。

誰もが言葉を発することなく、そのまま食べ続けた。

皿を持ち上げ、最後の一口まで掻き込む。

うまい、うますぎる。信じられないほど美味かった。

三人は今生きていることを実感した。

しばらく休むと、タチイも目覚めた。

それに気が付き、店主がもうひと皿カレーを持ってくる。

三人がそれをまじまじと見つめる。

「……………おかわりいります?」

「……………たのむ」

こうして、リレインのメンバーは地下29階でいままで食べたことのない美味しい食べ物をくちにしていままでにない不思議な体験をした。

きっと忘れられない一日となる。そして、この体験がまた彼らを強くするだろう。

「店主、世話になった。俺たちはまだまだ実力が足りなかったようだ。腕を磨いて出直す。そのうちまた礼をしにくる」

「ええ、いつでもいらしてください。あとこれ、ダンジョンの地図

です。これで無事に帰れると思いますよ」

「最後まですまないな」

「いえ、対価はいただいておりますので」

アヴァイトたちは栄喜を養うことができたこの店を後にした。

入る前までのパニックは消えている。

また出直そう。

しっかりと力をつけなくては、そう心に誓って帰りの道に行く。

映画とが見れます

大泥棒カンパチの悪運もとうとう尽きた。

カンパチの名を聞けば、誰もがすぐに泥棒を連想する。

ポートルレイルに住む貴族を主に狙う凄腕の泥棒だ。盗んだ金はきっちりと使い果たし、市場経済へと貢献する。

しかも貧乏人からは一切金をとらない彼の姿は、一種の義賊として人々に愛された。

しかし、そんな天下の大泥棒カンパチも手を出してはいけないうところに手を出してしまった。

たまたまポートルレイルにやって来ていた王女様のネックレスを盗んだのだ。

ダイヤモンドが散りばめられた、この世の贅を詰め込んだような代物を。

警護に油断があったわけではない、ただ単にカンパチの腕が良すぎた。

白昼堂々姫の泊まっている高級宿に、清掃人のふりをして入ったカンパチは、長年の経験から金庫をすぐさま探し当て、何重にもかかったロックをいともたやすく解除してみせた。

今回も簡単な仕事だった。それに見返りは大きい。

王女様が一番気に入っているダイヤモンドのネックレスだ。闇市場で売れば金貨1000枚は下らないだろう。

幸せに鼻歌を歌っていたカンパチだったが、この事件は予想外にも

王女の逆鱗に触れた。

王族の高価品を一つくらいとっても大した被害ではないだろうと踏んでいたカンパチだったが、実は母から譲りつけた大切な一品だったのだ。

王女の逆鱗は、すぐさま国王軍を動かすというところでもない結果をもたらした。

大都市ポートルレイルに派遣される国最強の軍隊。中には追跡専門部隊も入っていた。

カンパチが気が付いた時には既に手遅れだった。

街中に姿の見える国王軍。既に逃げるところさえなく、あっけなく姿を見つけられてしまった。

捕まれば死刑は免れ得ない。

必死に逃げた。なんとか街の端まで辿り着いた時に目に入ったのは、ダンジョンの入り口だった。

もうここしかない。自分が生き延びるにはこの場所に入るしか。

装備も、食料だってなかったが、迷いはなかった。

ダンジョンに入ってどうするかなんて考えもしなかった。

自分はいつ捕まるかわからない身だと常日頃から心構えていたので、決断が早かったのだと思う。

薄暗いダンジョンへ、人生で初めて踏み込んだ。

まさか、泥棒の自分が世界最大の竜のダンジョンに踏み入ることになるうとは。

魔物に泥棒のスキルなど無意味だろう。遭遇すれば問答無用で殺しに来るはずだ。

駆け引きの効かない相手か、考えるだけで嫌になりそうだ。

最初に遭遇した魔物はスライムだった。足は遅く、飛び道具も使っていない。

これなら騒ぎがおさまるまで、ダンジョン内で大人しくしていればなんとか助かる。

ちよつとだけ希望が湧いてきた。

しかし、それもすぐさま絶望へと変わった。

国王軍がダンジョンへと踏み入ったのだ。大勢の気配を感じ、カンパチは急いでさらに奥の階層へと降りて行った。

2階、3階と、どんどん下に。

国王軍は一切容赦してくれない。

逃げる際に唯一手にしてきたダイヤモンドのネックレスを見つめる。

これを返せば、命だけでも許してくれるだろうか。

いや、これだけ大事になったのだ。いまさら返したところで助かりはしないだろう。

なら道は一つしかなかった。

逃げ切つてやる。

なんなら、人類未踏の地下100階層まで踏破してやるうではないか。そしたら自分の死にも意味が出てくるというものだ。

迷いが消えてからカンパチの足は軽かった。

次々に地下への階段を見つけて、ダンジョンの奥へ奥へと降りて行った。

カンパチに戦う術はない。しかし、カンパチは隠れること、逃げることに絶対の自信と、才能があった。

それらは魔物にも当然に通用し、気が付けば地下25階まで来ていた。

腹は減っていたが、たまに冒険者の落とし物と思われるバッグから食料を調達できたので何とかしのげた。

いける、このまま本当に100階層までいける！

カンパチは次第に興奮して、ダンジョンの地下へと足を進めていた。

しかし、現実には厳しい。

地下27階層で、鋼の鱗を持った竜に遭遇した。

体格は大きく、獐猛な牙と爪をもっていた。

しかし、動きは遅く、カンパチを捕えることは不可能だった。

だからカンパチも油断して、すぐにその場を離れようとしなかった。まさか、鋼竜がその鎧のような鱗を飛ばしてくるなんて想像もしていなかったのだ。

弾丸のように飛んでくる鋼が、カンパチの足を貫いた。

他は全て外れたが、足を削られたのは痛い。

姿を隠して、簡易的な治療を施す。

数日休まないと治らない傷だ。

このとき100層への夢が途絶えた。

でも進むほかない。いけるとこまで行って、見たことのない景色を見よう。

そう決めて歩を進める。

カンパチの体力と気力が削られ、もう歩けないと心の底で感じたのが、地下29階層にいた時だった。

背を追う赤竜に、痛んで膿み出した足の傷。

しつこく魔物は追うのをやめてくれない。

本当に限界が近かった。もう自分はダメだ。この場で死ぬのだ。
(長いこと泥棒をして来た罰が当たったのかな)
こんなみじめな最後になろうとは。

しかし、運命はそのままカンパチを殺すことなく、彼の目の前に不思議な扉を見させる。

木できれいに作られた長方形の扉。真ん中には赤い魔石がはめられており、近くの看板にOPENと書かれている。

助かったのか？

いや、もつとやばい場所にも思えた。

赤竜が背中を追うこの状況下で、お店があるはずなどない。

それでも、今はその扉を開けるほかに選択肢はなさそうだ。既に立っているのさえきついから。

扉を開けると、涼しい風が体を包んだ。眩しい光に、思わず目をつむる。

光に慣れて、目を開けると、そこには木でできたカウンター越しに座る男性が見えた。

随分と若く、黒い髪をしていた。

「ここは？入ってもよろしいか？」

「はい、いらっしやませ」

笑顔で応えてくれる店主と思われる男。

「人食いの巣ではなさそうだな」

血なまぐさい匂いも、怪しげな煙も出ていない。

ここは安全かもしれないと思えた。

「あらら、お客様足を痛めていらっしやいますね。随分と化膿しているじゃないですか」

「ああ、辛い道中だったもので」
「はは、それもそうですね。ちょっと待ってください。回復薬をとってきますね」

そう言い残し、店の奥へと引つ込む店主。

随分と不用心だと思った。一人で経営しているのに、客から目を離すとは。商品を盗られても文句は言えないと思うのだが……。あの様子からしたら、全く価値観が違うのかもしれないと思った。

「お待たせしました。特製の回復薬ですよ」

手に持った二つの瓶。あれは冒険者が良く服用するやつだ。何度か見たことのある薬だった。

「患部に垂らしてください。もう一瓶は口から飲んでください。そのほうが効きがいいですから」

「すまねえな。ありがたくもらうぜ」

指示通りに患部に液体を垂らした。ジンジンと痛みが神経に伝わる。良薬は口に苦しだ。痛いのも我慢せねば。もう一本は口に含んで、飲み込んだ。苦くなかった……。

「飲み終わりましたね。数時間で回復できると思いますので、左手に見える休憩室を自由に使ってください。食事を持ってきますね」

「いいのか？金なんてないが」

「ええ、また今度来た時でいいですよ」

「たぶんだが、今度はねーな」

「それでもいいですよ。食事くらいいただきます。大量に作っていますので、余らせてももつたいないですから」

笑顔で、店主がまたも見せの奥へと消えていった。

不思議な場所に、不思議な人物だった。

休憩室のソファは柔らかく、凄く快適だ。

涼しくカラツとしている空気のおかげで、いつまでもいたくなる。棚に書物が入れられているみたいだ。それも自由に呼んでいいらしい。

高価な書物が自由にか……。

夢のような場所だな。

こんな場所が地上にあればいいのに。……、地上に作れよ！
ちよつとイラツとした。

「はい、今日は煮込みハンバーグをいっぱい作っているので、どんどん食べてください。おかわりもありますよ」

持ってきたのは、肉団子と、白い粒粒が集まったものと、茶色い温かい汁。

どこの国の食事だ。

匂いはいいが、見た目が悪い。特に肉団子が。

やることがエグイな、とても人間の所業とは思えない。

それでもグウグウ鳴りやまないお腹。仕方がない、もう三日もまともに食事を摂っていなかったのだ。

まずは一番安心できる、茶色いスープを飲んだ。

ホツとする味だった。魚の香りがほんのりして、心が安らぐ。

あとは白い粒と、肉団子。

白い粒からいこう。

スプーンですくうと、粘着性があることがわかる。湯気が出ているので、出来立てなのだろう。恐る恐る口に入れる。

ふわふわで、甘い。

噛めば噛むほどに甘みが漏れ出てきた。

ああ、幸せだ。

貴族の家から苦勞してお宝を盗み出すあの快感とはまた違う種類の快感。

地上でこんな喜びを感じたことはない。

全くなんでこんな店が地下にあるのだ。しかも29階層などに。

不平不満と、幸せを感じて、いよいよメインへと挑む時が来た。

グロイ肉団子に、スプーンを当てる。

「あっ!?!」

思わず声が漏れた。

力を全く入れていないのに、肉がスーツと切り分けられた。

なんてことだ。味わったことのない柔らかさ。

しかし、こんなことでは食べごたえがないのでは？

あつた!

口に入れると肉汁があふれて来て、噛めば噛むほどうまみ成分があふれてくる。

ガツンと来るうまさと、ふんわり甘い白い粒を併せて食べると、さららにうまい。

なんだこの幸せは。

自分は死ぬはずだったのに。最期にこんな幸せを味わえるとは思いませんでした。

「店主!」

「はい、なんでしょうか?」

なぞの四角い箱を眺めていた店主がこちらにやってくる。

呼んだのはほかでもない、礼を言いたかったのだ。

「おいしかった。ありがとうございます」

「いえいえ、そんなわざわざ」

「店主よ、お願いがあるのだが聞き入れてくれないだろうか？」
「ああ、おかわりですね？」

いや、それも頼もうと思っただけはいたが、違う！
せつかく固い決意をしかけたのに。

「違います。見たところこのお店は少し風変わりなお店のようだ。
私の見たことのないものばかりだからな」

「はい、それが売りなものですから」

「これを渡しておこう。飯と治療薬の対価だ」

カンパチが差し出したのは、王女から盗んだダイヤモンドのネックレスだった。

「これまた凄いものですね」

感心してダイヤモンドのネックレスに見入る店主。

「食事と薬代にしては大きすぎる対価だ」

「それもそうですね。他に何か欲しいものでも？」

話が早くて助かる。

「私はこの店を出たら、地上に戻ろうと思う。地上に戻ったら私は殺されるだろう。だから、人生最後になにか特別なことを味わってみたい。そのネックレスは売れば金貨1000枚は下らないものだ。だからそれに見合うものを、何かだしてくれないか。できれば未知のものを」

「はあ……、金貨1000枚。ちょっと考えさせてください。ポータルレイルも随分と大変な場所なんですね」
ポリポリと頭をかきながら、考える店主。

金貨1000枚といえば、1億ゴールドになるお金だ。簡単に対価を出せるはずもない。

ブツブツとつぶやきながら、店主が店の奥へと消えていった。

カンパチはゆっくりと待った。
きつとこの店なら、とんでもないものを出してくれるに違いない。
確信に似た気持ち湧いていた。
今はただ待とう。未知との遭遇を。

店主のタケルは悩んでいた。

一体何をもっていけばいいのかと。

間もなくあの人は死ぬらしい。しかもきつちり対価は貰った。
何を出せばいいんだー!?

タケルはここ一年で一番悩んだかもしれない。

そして、少し待ってもらうことにした。

55V型の液晶テレビを抱えて、休憩室で待つカンパチの元へと言った。

カンパチは驚いた。店主が真黒な箱を突如もって持ってきたのだ。
一体あの中に何が!? いや、薄すぎる。

物を入れる箱ではないかもしれない。どちらかといえば、板か。

「お客さん帰ったら死ぬみたいですし、そんな方に簡単に何を出せばいいのかわからないので、少しの間映画でも見ていてください。
その間に決めておきます」

「エイガだと?」

「ええ、劇場みたいなものです。このテレビが映し出しますので、しばらく見ていてください。一本2時間くらいですので」

全く知らない単語に、全くしない物体。

店主は更に円盤のようなものを持って来て、小さな箱へとしまっていた。
そして奇跡が起きた。

黒い板は突如光りだし、なかに幻想的な空間を描き出した。感動する暇もなく、店主が次々に操作を続ける。

人が箱の中にいた……、こんどは家が……、よくわからない生物も……。

「えーと、今手元にあるのが、『アナ馬と、桜の女王』だけです。で、しばらくこれで時間をつぶしておいてくれませんか？」

店主の操作で、その劇場が開始した。

箱の中に映し出されるアニメーション。

カンパチにはそれがファンタジーの世界に見えた。

夢に見たこともない、夢みたいな世界。

気が付けばいたぎりぎりに顔を寄せ、カンパチは『アナ馬と、桜の女王』の世界のとりこになっていた。

それは夢中で、子供に戻ったように囁り付いてみた。

目をキラキラさせて、音楽ばかりのその作品をみた。

店主のタケルは、あれでよかったのか？と疑問に思いながらも、カンパチの様子を見て、あれでよかったのだと思った。

見ている間に、『恐竜ランド』でも借りて来ようかとサービス精神を働かせる。

いや、対価を貰っているからサービスではないか。

タケルがDVDを購入して帰ってきたころ、カンパチはエンディングテーマを聞きながら大粒の涙を流していた。

「うおおおお、なんて素晴らしいんだ。もう一回みたい、店主！もう一回見せてくれないか？それとももう役者たちが疲れているか？」
「疲れてなんかいませんよ。でも、同じのより、違うものを見た方がいいでしょ。今度のはハラハラドキドキですよ」

DVDをセツトし、3D再生をする。

恐竜が飛び出るその映像に、もちろんカンパチは違う意味で涙を流していた。

「ありがとう、本当にいいものを見させてもらった」

「いえ、安いものですよ。高価なネックレスを頂いておりますので見終わった後に、カンパチが礼を述べてきた。

てっきりまだ見たいかとと思っていたので、何本か余計に買っていたが、もう満足らしい。

「死ぬ前にいいものを見れた。これでこの世に未練もない」

「そう言わないで下さいよ。きつとまだ助かる道はあるはずです」

「うーん、厳しいが、確かに希望はもって帰るとしよう。ではな」

カンパチは勢いよく、その快適な店を後にした。

(さてと、自首しに行くか)

それより、まずは無事に地上に戻ることが先だが。

お店の愛用者

ポートルレイルでアツい話題と云えば、もちろん『リレイン』のメンバーたちだ。

先日目標としていた30階層も無事到達し、赤竜の素材を持ち帰ったことでその人気は更に広まった。

このポートルレイルで今や彼らを知らない人はいないと言っほどの盛り上がりだ。

彼らの身にも実際何が起きたか知っているのは、ほんの一握りくらい。

その事実を知る一人、サラリスは酒屋猫ネコで酒を飲んでいた。

偶然にもリレインのメンバーと同じ店に通っている。今日はサラリスの方しか来ていない。

サラリスと云えば、数年前に話題になった人物だ。

一人で30階層を突破した天才的双剣使いの女性。今では当時の熱は冷めているが、いまだに根強いファンは多い。

ソロ冒険者で、寡黙にダンジョンに挑み続ける。そして、手堅い成果と共に戻ってくる。

このハードボイルな生き方に、多くの若者たちが憧れたものだ。

しかし彼女の強いファンの中には、それらとは関係なく彼女に羨望の目を向ける者も多い。

サラリスは大層美しい女性だった。

身長は女性にしては高い方で、手足はすらりと長い。

長く伸びたつややかな青い髪は、冒険者とは思えないほどきれいに整えられている。

何もかもが異質なのだ。冒険者に傷と汚れは絶えないが、彼女の顔はいまだに綺麗な肌が健在だ。特に手入れもせず、化粧もしないのに、その顔は美で生きている女性よりも美しい。

彼女に振られた男性は星の数ほどいると言われる。

そんな彼女に男の噂は一切ない。だから自然と噂が独り歩きをする。実は女性が好きだとか、数年前に最愛の人を亡くしただとか。どれも事実かどうか誰もわからない。

サラリスが誰とも深くかかわろうとしないし、そんな彼女に深い質問をする勇氣のある男もいなかった。

だから今日も彼女は黙々と酒場で一人、酒をたしなんでいる。

朝日が昇ると同時に、サラリスの一日は始まる。

大きなバッグを背負い、腰に2本の剣を括りつける。背中に背負ったバッグには、冷たい水を入れた愛用の水筒が入っている。

彼女が竜のダンジョンに潜り込む際の格好だ。

ダンジョンに向かう道中で朝食をとり、通いの鍛冶屋に寄っていく。打ちなおしてもらった、スピアの短剣を受け取る。

次は一週間分の食料を市場で買っていく。これで準備は整った。

「おや、もうダンジョンへ？三日しか休んでいないじゃないか」
いつも同じ店で買い物をするので、店のおばちゃんに顔を覚えられてしまっていた。

「いえ、買い出しに行くだけです」

淡々と答えるサラリス。

「買い出しに！？そんな大荷物で？」

「はい」

「そ、そうかい」
詳しくは説明をしない。ただ事実は伝える。
それがサラリスの性格であり、周囲も知っているからこそそれ以上は聞こうとはしない。
サラリスの準備が整った。またいつものダンジョンへと向かう。

彼女は竜のダンジョン55層まで行ったことのある実力者だが、今回は29層が目当てだ。

その分の準備しかしていないし、その分だけの心意気しかない。地図を持たずにその目的地まで行ける。

なんたって、彼女はあの場所の一番の愛用者なのだから。

サラリスはダンジョンに潜る前、路上で花を売っていた少女を見つけた。

ちょうどいいと思い、値段はいくらかと尋ねる。

「150ゴールド。10本買うと1300ゴールドだよ」

「そうか、それでは10本貰おう」

サラリスは値段の1300ゴールドプラス、1000ゴールドを多く渡す。

「花の分と、あなたのお小遣い分ね」

「ありがとう！お姉さん！」

軽く頭を撫でて、花を丁寧にバッグの中へとしまっ。

(さて、ここからは気を引き締めなくてはな)

気合を入れなおし、サラリスはダンジョンへと潜っていった。

50層へ行ける彼女でさえ、ダンジョン内では気を抜いたりはない。
い。

それがソロで生きていくということだ。

彼女はもともと人に心を開くのが苦手だった。

だからソロで冒険者になったが、ソロで活躍するということは更に気を引き締めなくてはならなかった。

そのせいか彼女はいつしか、無意識のうちに人を遠ざけるようになっていった。

彼女を表す言葉に、高値の花以上の言葉はない、そう思わせてしま
う。

人間誰でも孤独には勝てない。もちろんサラリスとて同じだ。

だけどポートレイルに彼女の居場所はない。己の家にはあるが、そこは一人きりだ。

彼女はいまから大好きな場所へと行く。唯一己をさらけ出せる場所へと、大好きな地下29階へと。

サラリスの戦闘はシンプルイズベスト。向かってくる敵を切り裂くだけの簡単なお仕事だ。

岩だろうが、鉄だろうが、堅い鱗をまとった竜たちはサラリスに切り伏せられる。

サラリスに高度な魔法があるわけではない。もちろん剣を強化する魔法は使用しているが、それでは説明がつかない部分が多い。

鋼竜を倒す一般的な方法は、鋼をまとっていない部分への集中攻撃。これがセオリーだが、サラリスは鋼ごと叩ききる。

斬れる場所、斬れるタイミング、彼女にはそれらが見えているのだ。冒険者のなかでは非力な彼女でも斬れる。息を合わせると言うのはそれほどに大事だ。

常人に理解できる範疇ではないが……。

そして、そんなとびぬけたセンスがまた彼女を孤独にしていく。

目の前で鋼竜が切り倒される。

太い首が寸断されており、血があたりに飛び交う。

一方のサラリスは全くの無傷。

いつものごとく、採取用の剣を取り出し、解体を始める。

魔石、牙、爪、高価な鋼をはぎ取り、仕事を終える。これらは全て地上で金になる。

鋼竜一頭だと100万程度の収入だ。

しかも今日は幸運なことに、鋼竜の尻尾から珍しいものがとれた。

片手で握り被せるくらいのサイズ、進化の布石と呼ばれる銀色の石である。

たまに見つかるこの石は、竜種の成長がこの先あることを告げている。

先日見つかった赤竜の亜種のように、鋼竜もまた進化を遂げようとしていた。

サラリスは喜んでそれを手にする。これが大好きでたまらない男がいるのだ。

(やった。お土産にしよっと)

大事に大事に、そっとポケットに入れるのであった。

地下29層。

サラリスは既に剣を抜いていた。

この階では絶対に警戒を怠るな、とある人物から聞いている。

なんでも赤竜の亜種がでるとか。しかも奇襲が得意ときた。

ならば先に剣を抜くぐらいの警戒は必要だろう。

しかし、サラリスの心は既にそこにはない。

いくら奇襲だろうが、自分の神速の剣にかなうはずもない。

剣を出しているのは、あくまで例の人物への敬意。

警告してくれたことへの感謝の意だ。

足取りは軽い。

ただでさえ足の速い彼女が飛ばして、目的の場所へと向かっていた。その道中で赤竜を三頭ほど狩る。一頭は最近出てきた亜種だった。もちろんノーダメージで倒している。首が綺麗に飛び、背中の青い筋から濁った色の血が飛び出た。瓶にその濁った血を流し込む。

（またお土産ゲット）

喜ぶサラリスだった。

目的の地に着いた。

サラリスの視界に入る、いつもの人工的な扉。相変わらず、魔物除けの魔石が赤く輝いている。

そして看板にはOPENの文字が。

私は客だ。何度来たっていいんだ。迷惑なんかじゃない。

荒れる息を整えて、誰へ向けられたかわからない言い訳を胸にサラリスが扉を開く。

涼しい空気と、眩しし光が注がれる。

この突然の世界変化には、サラリスも未だに慣れることはない。

「やあ、サラリスじゃないか。また来てくれたんですね」

店主のタケルがカウンター越しから、明るく声をかける。

「はい、また来ました。ここは品ぞろえがいいですからね」

ポートルレイルでは見せない明るい笑顔で、サラリスが挨拶を返す。

「今日も武器を見に来たのですか？きつとサラリスが気に入ると思つて、準備していたものがあるんです。待つてて！」

店主は店の奥へと消えていった。

サラリスは先にお土産を渡そうと思っていたが、今日も予定通りにはことが進まない。

店主が店の奥から持つてきたのは、黒い剣だった。

「黒竜の鱗と、純鉄の剣を併せて作ったものです。きつといい切れ味になる。サラリスのような女性でも扱えるように軽量化しているから、きつと気に入ると思いますよ」

「黒竜の鱗……」

サラリスは戸惑った、それも無理はない。

黒竜は地下70層付近に出没する竜である。その竜の鱗を、店主が加工に使ったという。

70層と言えば、いまだ到達した冒険者は10名程度。

その10名は地上では伝説的な人物として崇められている人物ばかりだ。

そんな場所の竜の素材を使つたと、簡単に言いのけている。

ここがポートレイルのど真ん中なら、店主のタケルはすぐにでも牢につながれるだろう。

罪状は詐欺罪だ。

しかしサラリスは疑わない。彼が嘘をつかないと知っているからだ。

「それはすごいですね」

「そうなんです。語れる相手が少ないから、サラリスが来てくれて本当にうれしいですよ」

少し興奮気味なタケル。その姿がまたサラリスのほほを赤く染めるのだ。

「どうだい？振ってみる気はありませんか？」

「はい、是非」

受け取ると、サラリスはいつものようにゆったりとしたフォームから剣をふるう。

金がとれるレベルに美しい剣舞だが、タケルは見慣れているせいか特に反応しない。

「すごくいい剣だ。バランスがよく、そして何よりも切れ味がいい。

一度振っただけですべてが伝わりました」

普通はそんなことできないが、剣の才能にありふれた彼女ならではの能力だ。

「そうか。サラリスがそう言ってくれるなら頼もしいですね」
かえした剣を受け取ると、それを鞘に戻すタケル。

大事なものののだろう、さらに布に包んでいく。

「その剣、私に売ってくれないだろうか」

しまおうと思っていたタケルに、サラリスが声をかけた。

「ん？でもこの間買ったばかりじゃ……」

「いや、でも、凄くその剣がきにいったのだ。お願いだ、その剣を私に売ってくれ」

「そこまで言われたら売るほかないですね。値段は300万ゴールドです。少し高いですが、なかなか仕入れができる物じゃないので黒竜の鱗を使っている剣が300万で買えるのは異常だ。転売すればポータルトレイルでは100倍の値段で売れるだろう。」

しかし、サラリスにそんな気はない。純粹にその剣が欲しい。タケルが作ったその剣が。

「今日はお金を持って来ていない。だが、次来たときに支払うから、他の誰にも売らないでくれ」

「了解。商品は先に渡しておくよ」

「え、でも……」

「サラリスはうちの大事なお客ですから。信頼していますよ」
思わず涙が出そうになった。

大好きな場所で、大好きな人に貰った信頼の言葉。

死んでもいい、サラリスはそんな危ないことを考えていた。

「そ、そうだ。お礼と言っては何だが、いつも世話になっているからな。お土産を持って来ている」

「ん？なんだろう」

サラリスはバッグからお土産を取り出す。まずは少女から買った紫色の花を取り出す。大事にしまっていたから折れていないし、しおれてもいない。

「ポートルレイルの花です。タケルが好きだと言っていたから」

「おおっ！！ポートルレイルの花ですか。これは見たことのない綺麗な花だ。すぐに花瓶に入れて飾るとしよう」

「まだあるんですよ。道中で狩った鋼竜から採取した、進化の布石です」

「おおっ！！こうも俺の好みのものばかりを」

「そして、赤竜亜種の毒入り体液も持つてきました」

「最高だよ！サラリスが来るといいことだらけだ！」

興奮気味にタケルは全てを受け取った。

欲しいものばかりが手に入った。彼女は本当に幸運の女神かもしれないと思った。

「これらをしまってくるから、サラリスは休憩室で休んでいてください。すぐに食事も持つていきますから」

「はい、いつもありがとう」

「こちらこそだ。じゃあ待ってて」

タケルは店の奥へと消えていった。

サラリスは休憩室の柔らかいソファに腰をおろす。

側にあるウォーターサーバーから紙コップに水を注ぎ、それを飲み干した。

（初めて来たときは、使い方がわからなかったなあ）

そんな昔のことを考えながら、ゆっくりと体を休ませる。

ここに来るようになって、もうすぐ三年。

当時の自分は荒れていたな、と思い出す。
そっと目を閉じれば、夢の世界へと入れた。思っていたよりも疲れ
ていたようだ。

― 3年前

当時16歳、サラリスは当時からソロ冒険者だった。
片手剣使いとして、名をはせていたところだった。
14歳と言う若さで冒険者デビューした天才、多くの者がその存在
を羨んだものだった。

そんなサラリスの冒険者生活と言えば、順調その一言。

あらゆるパーティーから勧誘を受けたが、そのどれもを断った。
必要と思わなかったし、何より人見知りだった。
己の能力でやっていけるうちは、そうしようと考えていたのだ。

しかし、サラリスは情報収集だけは怠らなかった。
金も必要な分は惜しまなかったし、人見知りの性格も我慢して乗り
越えていた。

一歩間違えればダンジョンで死ぬそんな日常、しかし見返りは大き
く、一言で言えば順風満帆な冒険者人生だった。
欲を言えば、だれか気を遣わなくてもいい友が欲しい。そんな小さ
な願望だけがあった。

そんなサラリスに転機が訪れる。
いつも情報を得ていた人物が冒険者を引退することになったのだ。
よく面倒を見てくれていたし、唯一会話する仲だったので無性に寂
しい思いが募った。

新しい、情報提供者を探さなくては。

これだけは手を抜いてはならないことだと常々考えている部分だ。ソロだとどうしても知らないことに、後手を踏んでします。情報があれば、自分の力でいくらでも乗り切れる。

そして見つけた新しい情報提供者。先輩冒険者であり、年上の女性だった。

話しやすく、経験も自分より積んでいる。

もしかしたら、仕事以外でも仲良くなれるのでは……、そんな儂い希望を持っていた。

しかし、サラリスと違い、その女性はサラリスのことを嫌っていた。正確に言うと、嫉妬していた。

その美しさに多くの男が目を奪われることが気に入らなかったのだ。だから、情報提供で嘘をついた。赤竜は40層から出現する、と。

当時のサラリスに赤竜を倒せるほどの実力はなかった。だからそこまでは潜らない。その警戒の意味で情報を集めていたのに、まんまと嘘をつかれたわけだ。

人見知りのサラリスとしては、その情報が全てであり、疑う気など一切なかった。

そして、迎えた竜のダンジョン29層。

ダンジョン内をウロウロしていたゾンビを葬った直後だった。突如背中から轟音が響いた。

通路を暴れながら突進してくる、赤い鱗の竜。

間違いなく赤竜がそこにいたのだ。

サラリスは冷静さを失った。赤竜自体にはない、40層からでる

はずのその竜が30層手前で出現した事実いだ。

なぜ!?

剣を抜いて戦っても、どうしても拭いきれない疑惑。

自分は騙されたのだろうか?

信じられない。あれだけ優しそくに振舞ってくれた彼女が……。

サラリスはまともに戦いに集中できないまま、剣をはじきとばされた。

ソロで、片手剣使いの彼女だ。打つ術なく逃げ惑うしかない。

そしてこの29層と言うのは、しつこいくらいに逃亡者を逃がしてはくれない。

立ちふさがる魔物に、背を追う竜たち。

血を多く流し、体力も失われ、目の前に迫る赤竜。

サラリスはそっと目を閉じたのだった。

そして目を覚ました先が、ダンジョン内とは思えない明るく涼しい部屋だった。

「目を覚ましましたか?」

「えーと、ここは?」

「竜のダンジョンBF29 何でも屋 です」

意味が分からなかった。

店の名前にこれほど驚いたのは初めてだ。それにこの快適な空間はなんだ!?

なぜ薄暗いダンジョン内で、晴天の真昼間の屋外よりも明るい!?

なぜじめじめしたダンジョン内で、カラッと涼しいのだ!?

そして、なぜ竜が目前に迫った自分が助かったのか?

全く説明できそうなものがなかった。

「随分とお疲れだったみたいでしたよ。もう5時間も寝ていました」
5時間も……。

長いソファアの上で、自分は寝ていたようだ。
その間にこの人が面倒を見てくれたのだろうか。

「あ、あの、礼を言ったらいいのか？」

「さあ、ここは商店ですからいららないのでは？」
なんともおかしな男だと思った。

体が細く、黒髪黒目。どこか異郷の部族だろうか。

「お腹は空いていませんか？」

「うう……」
めっちゃめっちゃお腹が空いていた。でも、そんなこと簡単に言い出せない。

「スパゲティがありますから、持ってきますね。あ、パスタって言った方が女性がいいのかな？」

パスタもスパゲティも知らない。自分は流行りに疎い女だからな。自分を卑下しながら待った。自由に飲んでいいと言われた、水の入った透明なボトルを見つめて。

紙コップが収納されているところから、一つ取り出す。

人の手で作ったとは思えない成功か作りだ。こんなものを紙で作り出すなど、効率が悪い気がしてならない。

こんな回数使ったらダメになってしまうではないか。もったいない。

それにしても一体どうやって水を注げばいいのか。
透明なボトルに紙コップを数回ぶつけてみた。通り抜けられる訳ではなさそうだ。

魔法なのか？何か解除する魔法でも？

しかし、店主は自由に飲んでくれと言った。なら自由に飲めるはずだ。

そして、みつけた蛇口。

どうやって入れたらいいかわからないまま、コップをしたに置いた際に自動で水が注がれた。

そういう魔法だったのかと、感心した。

冷たく美味しい水だった。

しばらくして店主がスパゲッティ、いやパスタを持ってきた。

「今日はミートソースですよ」

ミートソース……、グロイ名前だし、麺にドロドロした赤い液体が乗っている。

食欲をそそるものではないな。

しかし厚意は受け止めなくては。

フォークで麺をすくい、一口食べる。

そこからの記憶はあまり覚えていない。気が付いたら皿が空になっていたのだ。

食べ終わると同時に幸福感が体を包む。

サラリスはようやく、助かってよかったという感情を抱いた。

「おかわりいります？」間髪入れずに近寄る店主。

「いや、一杯でお腹いっぱいだ。ありがとう、非常に満足した」

「そうですね。それはよかったです」
店主が皿を下げに店の奥へと消えた。

ここは何でも屋と言っていたな。

確かにいろいろなものがある。そのどれもが見たことのないもの
に思えた。

流石に、流行に疎い自分でもこれはおかしいと分かる。

戻ってきた店主に尋ねることにした。

「ここは何を扱っている場所なのだ」

「え？なんでも、ですが」

「はあ、と答えるほかない。突っ込んで質問しようにも、あまりに未
知なものばかりだ。」

試しに、棚に置いてある商品の一つを指さす。あれは何かと。

「ああ、あれは水筒ですよ。最近のは温度の保存に優れていますか
ら、おススメですよ」

黒色の、おそらく鉄でできたボトル。

精巧な作りで、水を持ち運びできるらしい。しかもずっと冷たいま
ま、温かいお湯も大丈夫とのことだ。

水筒と言えば、動物の胃袋を加工したものが一般的だが、まさかそ
れを鉄で仕上げてしまうとは。発想と、その技術力に脱帽した。

不思議な場所に不思議な商品。

「……売っていただけないだろうか」

「ええ、もちろんです」

「あ、お金が……」

「また今度いらしたときで構いませんよ」

「そ、そうですね」

初めて来た自分に、商品を対価なしで渡してくれるらしい。次いつ来られるかわからないと伝えたが、それでもいいと。

なんだか、この人に嫌われたくないと思った。

もつと強くなつて、安全マージンをもってこの地下29階層に来られるような冒険者にならなくては。

そして、この人にお金を払うのだ。

そしたら対等な立場になれる。この不思議な商品でいっぱい何でも屋に、客として来られる。

なんだか、初めて自分の居場所を見つけた気がしたのがこの時だった。

「世話になった。うまい飯と、水筒をありがとう」

「はい、またいつでもお待ちしております」

頭を下げた。純粹にこの人に感謝がしたかったのだ。

「あと、これも持って行ってください」

去り際に店主が差し出したのは、2本の剣だった。

なんでも自分の倒れていた側に、鞘が転がっていたので剣士ではないかと目星をつけていたそうだ。

それなのに、剣を持っていなかっただのはどこかで落としたのであろうと。

「お金はいらなから、持って行ってください」

「そんな、こんなに良くしてもらって、なお剣を貰うなど」

「でも手ぶらじゃ危ないダンジョン内ですから」
それもそうだ。

申し訳なく思いながらも、片方の剣を受け取る。

しかし、半ば強引につかませれる2本の剣。

「一本で構わないのだが」

「一本より、二本の方が安心です」

「うん」

サラリスはもうそれ以上何も言わずに、2本の剣を受け取った。その日以来、彼女は双剣使いのサラリスと知られることになる。

「……ここは？」

「眠っていたようだね。サラリスはここに来るといつも気持ちよさそうにソファで寝ますね」

店主のタケルがクスクスと笑っていた。

どうやらタケルが店の奥に消えている少しの間に、眠りに入っていたようだ。

すぐく長いこと夢をみていた、3年前に初めてこの店に来た時のことを。双剣使いになったときのことを。

「よだれ、出ていますよ」

「やっ」急いで袖で、拭った。

見られてしまった。

でもいいのだ、初めてじゃないから。

それにこの場にはもう自分の居場所だと感じていた。よだれくらい、今さらだ。

「スパゲティのミートソースがけ持ってきましたよ。あ、パスタです」

「うわぁー」

湯気をたてる、目の前の料理に目を見開いた。

お腹は当然空いていたが、それよりも、大好きな店で、大好きな料理を食べられることが何よりもうれしかった。

サラリスは、こうして地下29階で栄養を養うのだった。

トイレの貸し出しも行っておりませす（前書あり）

ギャグ回です。

食事中の方は気をつけてください

トイレの貸し出しも行っておりす

今思えば、ただの挑発だった。

なぜそれに乗ってしまったのか。挑発だと気が付いていたし、頭は冷静だった。

しかし、思うより早く口が先に開いてしまったのだ。

「行ってやるうではないか！竜のダンジョンへ！」

その一言が今の最悪の事態を招いてしまった。

まさか私が、竜のダンジョン29階層ごときで命の危機に陥ろうとはな。

キーラは苦しみながらも、己の哀れな姿を思い浮かべながら、ニヤリと笑った。

(もはやここまでか……)

時間は一週間前へと遡る。

王国最強の騎士、キーラ・スフィアは城下町を歩いていた。

王女が城下町へと行きたいという要望を出し、過保護な国王はその護衛に王国最強の騎士をつけた。

キーラからしたら退屈な任務でしかなかった。

こんな無駄な時間があるなら、一秒でも多く剣の腕を磨いておきたい。

「わあ、このお洋服もきれいですわー」

王女が女の子らしく楽し気にショッピングをしていた。

自分もあのように少しは女性らしく振舞うべきなのだろうか？

いや、そもそもスフィア家ではそんなことを許してもらえなかった。今の道しか進めなかったし、やはり自分にはこの道が一番だと思う。

退屈だが、王女の身に何か起きないようにしなくては。

安全な城下町でも、キーラは直立しその任務を真面目にこなしていた。

王女のショッピングが一通り済んだころ、今度その目はスイーツへと向かった。

荷物を持ったお付きの者が付いていけないほどに駆けて、流行りのスイーツ店へと入る。

やれやれと思いつつも、キーラはその後ろ姿を追った。

店内はまさに女性が好きそうな、ふんわりとした空間が広がっている。

柔らかい色の壁に、丸っこいテーブルがいくつか。

店員の女性たちは襟元の緩いエプロンをつけていた。

もう帰りたい、そんな気分にする場所だった。

お付きの者たちはまだ来そうにない。

来たら王女が存在に店がてんやわんやするのだろうか。

これまで辿ってきた店の流れから、キーラはそんなことを考えていた。

その退屈な考えをとある男が遮る。

長身で、甘い顔をした男が王女にちかづいてくるではないか。

すぐに間に割って入るキーラ。男の腰に剣があったからだ。

「何か用か？王女にたやすく近づかれては困る」

「はあ？王女？」

言われてポカンとする男。

まさか王女が護衛一人で歩いているとは思いつかなかったのだろう。すぐに荷物持ちのお付きの者が10人ほど来て、キーラの言葉が真実だと知った男は少しだけ慌てた。どこかの貴族の女の子が買い物をしていると踏んでいたが、まさか王女だったとは。

「いやはや、これは失礼した。まさか王女様がこんなか弱そうな護衛一人をつけて城下町に降りてくるとは思いもしませんでしたので」男は相当自分の腕に自信があるのだろうか。護衛であるキーラの前で余裕を見せ始めた。

「その言葉、時と場合によっては許さないこともある。気をつけておけ」

へらへらとする目の前の男に鋭い目を返すキーラ。男の方は結構ハンサムな顔立ちだが、キーラには全くどうでもいい事だった。

「へえー、そりゃ怖い。僕だって王国に立てつこうなんて気はないさ。君に後ろ盾がなければ話は別だけどね」

「それは、私に後ろ盾がなければ、実力に物を言わせてやりたい放題しようと言うのか？」

「あれ？そう聞こえたなら、それでもいいですよ」あくまでニコニコと笑いながら話す男。

最悪キーラに斬りつけられても自衛できる自信があったのだろう。もちろん彼は目の前にいる人物が王国最強の騎士だなんて知らない。

「無礼にもほどがあるな。しかし、今は王女の護衛の身。この場は見逃す故、早々に立ち去れ。最期の通告だ」

「はい。国家権力様は怖いですねー」

ピクリとキーラの頭の血管が反応した。
我慢だ、我慢！そう自分に強く言い聞かせる。

「さつきから黙って聞いていたら、あなた随分と失礼を言うのですね。ここにいるキーラが王国最強の騎士だと知つての発言かしら？」
我慢しきつたキーラだったが、予想外にも王女が反論してみせた。

「へー、こんなか弱そうな女性があ有名な『炎のキーラ』か」
「そうですよ。見逃してもらつたことを感謝して、さっさと立ち去りなさい！」

「そうしようとしていたところでしたのに、王女様が呼び止めたではないですか。やれやれ」

余裕そうな表情の男と、プクーと顔を膨らます王女。

「キーラ。この者を斬っておしまいなさい。非常に不愉快です！」

それでは私怨ではないか。

キーラは少し困つたが、命令なら仕方がない。

きらりと光る愛剣を抜き去り、男の前に立ちふさがる。

「ご命令だ。残念だが、ここで斬られてもらつたしよ。大丈夫、殺しはしない」

男はキーラの行動に喜び、願つてもないと言わんばかりに滑らかな動作で剣を抜いた。

その動きだけで、この男がただ者ではないことが窺い知れる。

「『炎のキーラ』に勝つたら、明日から俺が王国最強の騎士様だ」
「ええ、それでいいですわ！」

王女が了承してしまった。

負けたら明日から無職ですか。キーラは巻き込まれたこの状況がだんだんと面倒くさくなつてきた。

「はっはー！明日から俺が王国最強の騎士だ！」
叫びながら剣を振り上げる。

キーラは剣を斜めに構え、振り下ろされた剣をそのまま受け止めた。

金属がぶつかり合う鋭い音がして、片方の剣が折れて宙に飛んだ。
もちろん、キーラの剣は折れていない。

相手の剣を折るひとつの技である。キーラからしたら初歩中の初歩の技だ。

男の腕も悪くはないが、所詮は実力差がありすぎた。

「なっ！？こんなの無効だ！剣が折れたんだ！勝負はまだついていない！」

見る人がみれば完璧に勝負はついているが、観戦していたのは素人ばかり。

確かに不憫だと言う声が少しばかり上がる。

「僕は負けていない！実力を出し切れればこんな奴なんかには負けるはずが」

「実力を出させないのも、ちゃんとした戦術だよ」
的を得たキーラの物言い。

しかし、もはや聞く耳を持ってなどいかなかった。

「どうせ騎士など揃った条件下でしか活躍できぬ凡愚どもだ。ダンジョンへ潜れば瞬間に役立たずとなり果てるだろう。きつとそうだ。お前らなんて冒険者の足元にも及びはしない！」

言い切ったが、もはやキーラの心には響かない。所詮目の前の男は今しがた自分に負けた、そこら辺の犬と同じ価値しかない存在だ。

「そんなことはありません！キーラはダンジョンでも活躍できます」

もう放っておこうとしていたが、またも王女が反論する。

「できないね！」

「できます！キーラは竜のダンジョンでだって活躍できます」

「いや、できないね」

「できます。ですよね？キーラ」

もうこのやり取りにも面倒くさくなり、一日の疲れもあり、キーラは考えるよりも口を先に開いた。

「行ってやるうではないか！竜のダンジョンへ！」

こうして始まったしょうもない争い。

ルールはキーラが一人で30層にいる赤竜を狩って、素材を持ち帰ること。

一般に30層まで行ければ一人前の冒険者と認められることを考慮してのルールだ。キーラが一人なのを考えれば十分な条件だろう。

負けた方は勝ったほうに謝罪をする。

子供の喧嘩みたいになってしまったが、多くの国民の前で約束した条件なので王女とて簡単には取り下げることには出来なかった。

「頼みましたよ。キーラ！」

こうしてキーラは面倒くさい仕事の日に、さらに面倒事を押し付けられたのである。

そして、キーラの修羅場へと話はつながる。

キーラの初ダンジョンの道中は順調だった。

軽く冒険者の心得も頭に入れていたので、あとは実力が穴を埋めて余りあった。

「んー、なんてことはないな」

鉄竜の死体の上に座り込みながら、キーラは軽めの昼食をとっていた。

このペースなら一日半で30層まで到達できる。

この程度の相手なら奇襲でも、寝込みを襲われても問題はない。

少しだけ期待していたが、キーラは全く心躍らせることなくダンジョンを一階ずつ降りて行った。

近頃は荒事もなく、キーラの仕事は退屈そのものだった。

一番心躍り、体を追い詰めることができる時間が、剣を教えてくれた父との特訓の時間である。

なんとも平和な世の中になったものだと思う。

それもこれも竜のダンジョンからもたらされる恩恵があつてこそその平和だった。

キーラはそれを考え、今回の出来事がいい勉強になればと思っていた。

(さてあと、先を急ごう)

食料はそれほど持つて来ていないが、飢えにはめっぽう強い。

ダンジョン内では水が流れている場所もあり、食料面でキーラが不安がることは何一つなかった。

初めてとは思えない足取りで、ダンジョンを次々に攻略していくキーラ。

魔物も竜でさえ、その暴力的な存在にどうしようもなかった。

キーラは任務の成功を確信していた。

まだ見ぬ赤竜だが、鋼竜の強さを考えれば対処できないレベルではなさそうだ。

ダンジョンBF29

ダンジョンに入って、一日半が過ぎようとしていた。間もなく30層と言う場所で、初めて遭遇する赤竜。

早さも、破壊力も今までの竜のすべて上をいく。

キーラもその強さに驚きを隠せないでいた。

そして戦うこと30分。

先に地面に膝をつけたのは、キーラだった。

30分の間に他の竜が来なかったのは幸運と言っていていいだろう。

なにせこの30分、キーラは赤竜に押されっぱなしで、常にぎりぎりの戦いをしていた。

膝をついたキーラに鋭い爪を立てて襲い掛かる赤竜。

体をひねりかろうじてそれをかわす。

(ふうう、うぐうううううっ!!)

続けざまに放たれる赤竜の火炎ブレス。

広範囲に広がった炎がキーラに襲い掛かる。

「風の壁よ、我を守りたまえええ、ふうううう!!」

なんとか呪文が間に合い、風のバリアが炎からキーラを救う。

早く決着をつけなくては。

キーラはあせっていた。

時間が過ぎればすぎるほど、状況が悪くなることを知っているからだ。

「現れよ、偉大なる炎の精。目の前の竜を焼きつくせええ、ふんっ

！」

お得意の剣術を使うことなく、キーラは残り少ない魔力をひねり出

した。
精霊を呼び、大炎をもって相手を焼き尽くす最大級の魔法。
まさかこんな場所で使う羽目になるとは。

キーラの最大級の魔法は無事、竜の体を焼き尽くした。
戦いは終わった。しかし、キーラの顔に余裕はない。
むしろ、さっきよりも苦しそうだ。

キーラは生真面目で、規則の正しい生活を心がけていた。
いつも決まった時間に食事をとり、決まったメニューの訓練をする。
もう体が覚えてしまっているのだ。

だから今朝も目が覚めると同時に、そいつはやってきた。
そう、便意だ。

キーラは赤竜と戦っていた時、同時に便意とも戦っていた。
(くそっ、便意で本気が出せない)
そんなことを思っても、赤竜は手加減をしてくれない。
なんとか魔法で倒すことは出来たが、そろそろピークも近かった。

ダンジョンに来て、思わぬところで躓いた。
まさか便意で苦しむことになるうとは。

慣れた冒険者たちはそこらへんすっかりとしている。
ダンジョン内にダイレクトでする者もいれば、魔法を使って工夫す
る者もいる。

キーラにはその両方の選択肢がなかった。
使えそうな魔法はなかったし、ダイレクトはありえない。

高貴な、王家を守り続けて数百年のスフィア家の血を引いたこの私
が、ダンジョン内でダイレクトなどありえない！断じて！

そのプライドと、かたくなな姿勢がキーラを命の危機に立たせてい
た。

ダンジョン内をゴリラのように走る、キーラ。

赤竜は狩った。

はやく上の階に戻りたいのだが、この階は赤竜がしつこいほどに出
る。

キーラの場合も例外ではなく、限界ぎりぎりの状態で背を追われて
いた。

吹き出る脂汗。

脳裏をよぎる最悪の結果。最悪とは、死ぬことではない。

ああ、いつそのこと死んでしまおう！そのほうがまだ。
涙を流しながら、それでも走り続ける。

そして、キーラは希望の光を目にした。

目の前に扉があるではないか。

きつとあの中に人がいる。

ダンジョン内だろうがなんだろうが、知ったことではない。
そんなことを考えている余裕はない。

そこに人がいる。人がいれば便所がある。
今はそれだけで十分だ。

「たのもおおお！店主か！？」

扉を開いて、目の前の男をすぐさま視界に入れる。

「はい！？そうですが……」

「少しだけ……」

便所を借りたいと言いかけて、キーラの口が止まった。

自分はなんてはしたないことを言おうとしたのか。

目の前には殿方がいるのだぞ！？

しかもよく見れば、なかなかいい男だ。

そこに突如現れ、う〇こさせる！だなんて言えるはずもない。

「ああああああああ！！神は私を見捨てたー！！」

「どどどどど、どうしたんですか！？急に！？」

「ああああああ、いやー！ー！！！！」

「えっ！？なに！？なんなの！？」

タケルは狼狽するしかなかった。

普段なら、例え店に竜が突っ込んできてもこんなに慌てることはないだろう。

脂汗を流しながら、キーラは目だけをきよろきよろと動かした。

この店はおかしいものがたくさんあるが、今はどうだっていい。

あるのか！？便所はあるのか！？

ほとんど防衛本能だったのだろう。キーラの目は自然と部屋を索敵し、そして見つけた。

『化粧室』と書かれた扉を。

たしか貴族の女性たちは化粧を直すと言って、用を足すと聞いたことがある。

普段なら絶対思い出せない知識が飛び出た。自分とは関係ないと思っていたが、まさかこんな場所で役に立つ日が来るとは。帰ったら

女性のたしなみを勉強しようと思つた決心した週間でもあった。

「化粧を直させていたきたい！」

「化粧！？してないですよね！？しかもダンジョンで必要ですか！？」

「直させていたきたい！！」

全力での叫びだった。

「は、はいっ！」

タケルは急いでお客様をトイレへと通した。

たくさん変な客が来ているお店だが、とびぬけておかしな客だった。

キーラは念願の便所に着いた。

白くピカピカに磨かれた便器がそこにはあった。

バラのいい香りがする。便所なのに。

ああ、我慢していた分、神がご褒美をくれたらしい。

「神はいたようです」

早速済まそうと思ひ座るのだが、ふと便所と店主がいた場所との距離が気になった。

隙間のない素晴らしい作りの扉だが、音は漏れないのだろうか？

……、気にしている場合じゃない！

……、いや気になる！

どうしよう!？

やるか!？でも……。

またも高速回転しだすキーラの脳みそ。

そして見つけるその神が与えし、ボタン。

ボタンには、『音王女』と書かれていた。

便所で音のついたボタン……、キーラは迷わずそれを押し、同時に我慢していたものを出した。優しい音が全てをかき消す。恥も、苦しみも、なにもかもが水に流れていく。幸せな時間だった。

手を洗い終えたキーラは店主の前に立つ。

「店主よ。すべて忘れようじゃないか」

「何を!？」

「ではな、またいつか会おう」

「何も買っていないの!？」

「ははは、ははははっ」

こうして奇妙なお客?キーラは地上へと戻っていった。

儲けるときは儲けます

偶然お店に来るお客と、愛着をもってお店に来るお客。

バラライ・ポースは商売のために、ダンジョン内のお店へと向かっていた。

彼も店主のタケルとは長い付き合いになる。

潰れかけた商會を立て直した彼には、秘密があった。

祖父が立ち上げ、父がつぶしかけたポース商會は今や、ポートルで一、二を争う大商會とやりつつある。

ポース商會が扱う商品は、食料。

安価で大量の食料をポートルの市場へと供給することこそが、彼らの使命である。

しかし、新たに参入してくる商會の目新しい商戦に敗れ去り、父の代で商會は傾いた。

そして父が心労で倒れた時に、商會に残っていた人物はバラライ・ポースと祖父の代から雇われている護衛が一人だけだった。

その護衛も既に六〇歳をすぎた老齡であった。

「なぜあなたは残るのですか？」

「おじい様に、返しきれない恩があります」

「祖父ならもういない。お前も沈む泥船に乗っていないで、他の仕事を探すといい」

「いえ、あなたはおじい様によく似ておられる。きっとポース商會を立ちなおさせることでしょう」

いまなおポーヌ商会で語り継がれる美談である。新入商会員がまず読まされる文章でもあった。

こうして新たに商会のトップとなったバラライと、老齡の護衛は明日へと向かって一步を踏み出した。

初めに二人が大きなカバンを背負って向かったのは、竜のダンジョンだった。

まっとうな商人が当時の彼らを見ていたら、狂気の沙汰としか思わないだろう。

なぜ新しい市場を開拓するためにダンジョンへ潜るのか。馬鹿かと言われていたことだろう。

二人ははじめ、冒険者たちが使用する携帯食を開発するために竜のダンジョンへと挑んだ。

簡易に運べて、美味しく、日持ちする物を。

そんなものを作るには実際にダンジョンに潜るほかない。

経験して、知って、必要に迫られる。そうやって商品を作ろうとしたのだ。

しかし、ダンジョン内でバラライは荷物でしかなかった。バラライに戦闘の心得はない。

戦闘は全て老齡の護衛に任せていた。

そんな無茶をしてしまったがために、彼らは29層で命の危機に遭い、そして幸運にもダンジョン内のお店を見つけた。

綺麗で、心地のいい風が吹くそのお店に、バラライは感激した。

どうやったたらこんないい店がつくれるのか。

この店には我が商會を立ちなおさせる物があるのではないか、彼は店主に懇願した。

何かいい商品を、ポートルレイルで流行る商品を納品してくれないかと。

そして、店主から手渡された金の生る木。

ポートル商會の快進撃はそこから始まったのだ。

「仕入れに向かいます。私がない間の代表代理をお願いしますよ」肩をポンと叩かれた青年が爽やかな声で返事をする。

毎月一回あることなので、いまさら硬くなることもない。

バラライには秘密がある。彼はいつもよくわからない場所から商品を仕入れて来て、商會に持ち帰る。

その商品たちが商會を成り上がらせたので、多くの者がその仕入先を気にしていた。

しかし、深く聞くことはない、間違いなく教えてくれないからだ。

バラライが連れていく護衛はただ二人。

一人は商會最古参の老齡護衛と、もう一人はその護衛の息子。

たったの3人で仕入れに向かうのだ。

しかも商會トップのバラライ自身が大量の金貨と銀貨を持ち歩き、その足で商品を持ち帰る。

なぜこんな不便なことをしているのか、商會の人間を使えばいいではないか。

そこから導かれる結論が、仕入れ先を暴かれないということだった。

一体バラライは、どこへ向かっているのか。

もしかしたら、怪しい錬金術でも使っているのではないか。
若い商会勤めの間で都市伝説的な噂が立っていることを、彼らは知らない。

「では、いきましようか」

「ええ」

長年の付き合いの二人と、信頼できる護衛の息子。

バラライは商会の中でも、この二人には全幅の信頼を置いていた。

いつかは自分の後を引き継ぐ人間を探さなくてはならない。代表代理を頼んでいる青年が今のところ最有力候補だ。

「危険ですが、今回も儲けさせてもらいましようか」

彼らは竜のダンジョンへと入っていく。

初めてそこにたどり着いた時とは既に状況が違う。

行き慣れた道と、戦い慣れた護衛の親子。

戦闘を極力避けて、進むこと一日半。

彼らはその綺麗な扉の前に立っていた。

いつも通りの赤い宝石が埋められた扉と、OPENと書かれた店の立て看板。

扉の取っ手を引いて、ゆっくりと開いた。

中から漏れ出す涼しい空気。何度来ても、商店の理想がそこにはあった。

店内は明るく、清潔感があふれる。

店主はいつもお客が入ると、ニコリと挨拶をしてくる。ああ、やはりここはいいお店だ。

「バラライさん。今月ももう15日になっていましたか」
バラライの来店で月の日付を再認識した店主のタケル。
毎月15日は、バラライが商品を入荷しに来る日だ。
そのため店の奥に既に商品を準備している。

「タケル様。今月もまた商品を仕入れにきました」
言わなくてもわかってのことだが、あいさつ代わりに一言一言言葉を交わす。

了解したとばかりに、店主は店の奥へと引つ込む。

店主が肩に担いで持ってきたのは、何かをパンパンに詰めた麻袋だった。

「はい、今月分。いつも通り30キロ入っていますよ」

「ありがとうございます。では、対価もいつも通り、金貨80枚と銀貨20枚。それと今回は……」

今回はいつもより多く、金貨を10枚差し出す。

「よしなにしてもらっている分です」

「いいですよ。こちらも儲けさせてもらっていますから」

バラライが少し強引に追加分の金貨も手渡す。

そこまでやられて断るわけにもいかない。

何より金貨10枚だ。

金貨一枚で100,000ゴールドの価値がある。それが10枚である。かなりの金額になるのだ。

「それと今日は、少しお願いがありました」

金貨を多く貰っている時点で何か言われることが分かっていた。タケルは既に聞く体制に入っている。

「いつもお願いしていることですが、あくまで取引は我がポース商会と独占でお願いいたします」

「そんなことでしたか。それはいつも言っているように、こちらも裏切るようなことはしませんよ」

「我々ポース商会も儲けさせてもらっていますが、ふさわしい対価をタケル殿にも支払っているつもりです。是非今後ともよい関係を築ければ」

「こちらも儲けさせてもらっていますから。本当に」
少し申し訳なさそうにするタケル。

タケルの仕入れ値を知らないバラライたちには永遠にわからない罪悪感だ。

「最近どうも後をつけられてしましてね。そのうち仕入れ先のこのお店もバレるでしょう。そのときに取引先を変えられると困りますので」

「わかっていますよ」

店が知られて客が増えるのはいいことだが、常連のあつい信頼に応えるのも大事な仕事だとタケルは心得ている。

タケルから渡された麻袋を背負いのバッグに入れ、そそくさと帰ろうとするバラライたち。

それを見て、タケルが呼び止めた。

「ちょっと待って、もう行くのですか？」

「ええ、これ以上の滞在は迷惑になりそうですので」

「いつも言っているけど、迷惑じゃないですよ。今日もご飯食べていってください」

断ろうとしていたバラライだったが、護衛の一人がお腹をグーと鳴らせた。

もちろん健全で胃腸のしっかりした、若い護衛の方だ。

彼は実はこの店に来ることが一か月で一番楽しみだった。ダンジョン内では自分の腕を振るうことができる。

仕事は商会の利益になるし、仕入れ先では珍しいものを見ることがもできる。

それに何より、ここでは美味しい飯が出るのだ。

「食べていきましようか。ここのご飯は美味しいですからね」

「それはよかった。今日は大量に牛すじを煮込んでいますので、楽しみにしててください」

料理名は『牛すじの味噌煮』らしい。

バラライは目の前の料理に、初めてがっかりしていた。

ここでの飯は今まではずれがなかったが、今日はなんと筋が出てきた。

筋なんて食べる物なんかじゃない。

噛み切れない、味が無い、飲み込めない。

最悪だ。それが出てきてしまった。

どうするんだ。しかし、若い護衛は迷わず牛筋煮込みと白いご飯を掻き込んでいる。

既に使い慣れた箸を起用に駆使して。

若い護衛の食べる勢いが止まらない。いつも通りおいしそうに食べている。

美味しいのか？筋が美味しいのか？

自分も恐る恐る筋を口に入れた。

……、やわらかい。口の中でとろけた。あふれ出るうまみ成分。

ああ、そういうことだったか。
自分も使い慣れた箸で白いご飯を書き込む。なんてうまいんだ。
そしてなんで自分はさっき食べるのを拒もうとしていたのか。

気が付いたら無我夢中で食べており、あっという間に食べ終えた。

「美味しかったですね。老齡の私にも優しい料理でした」
長年連れ添った護衛が口を開く。

確かにあの柔らかさなら、彼の口にも会うだろう。

「筋が一体どうしてあんなに柔らかくなるのか」

その疑問には、食べ終わった皿を下げて来た店主のタケルが答えた。

「圧力鍋と言うものを使っています」

「アツリヨクナベ？」

「そう、圧力鍋です。低い温度で水が沸騰するので、煮込みに便利ですよ」

「そんなものが……」

素直にすごいと思った。そして、欲しい。

水の沸騰が早い鍋か。

以前涼しい風を吹き出していた、エアコンと言うものを買おうとしたが断られてしまった。

なんでも使えないものを売るわけにはいかないのだとか。

きつと独占している魔法器具なのだろう。簡単に技術を外に漏らすわけにはいかなかったのだろう。

今回も断られるかもしれない。

しかし、儲かるかもしれない物を前にして、商人が黙っているわけにはいかない。

「そのアツリヨクナベと言うものを売っていただけないか。次回来た時でいい。技術を盗むことにもなるだろうから、金貨150枚を用意しよう!」

バラライの提案に、少し考え込むタケル。

んん、いい話だ。

いい話すぎて申し訳ない。

別に自分が作っている商品でもないし、金貨150枚は対価として大きすぎる。

でも、言うことは一つ。

「いいですよー」

少し目を逸らしながら了承したタケル。

バラライも思わず拳を握った。

儲けを考える二人。ぐふふと笑う二人。

(やった。 いい儲けだ)

「では、今度こそお世話になりました。また来月もよろしく願いますね」

「ええ、こちらこそ願います」

二人は握手を交わし、それぞれの生活へと帰っていった。

賢者が気に入る商品もあります

竜のダンジョン踏破に最も近づいた男、賢者アストリウスはチビチビと燻製肉をカジッていた。

老後の生活は退屈で、弟子たちも旅立った。

だから新しく見つけた趣味はそれなりに楽しいものだった。書物の作成。

それが彼の見つけた老後のひそかな趣味だった。

実際の魔法理論を組み込んだ小説。ポータルレイルで地味に売れている『魔法やろうよ!』の作者である。

夢も目的もないふんわり系主人公に、同級生の女の子と一緒に魔法やろうよ!と誘う今流行りのユルユル系魔法ものだ。

「うーん、ネタに詰まったのお」

既刊6冊も出していると、流石に大賢者の彼もネタに詰まるらしい。詰まると逆に進む燻製肉。さつきから弱いあごの力でチビチビかじっているのだ。

「あーダメじゃの。ちょっと気晴らしにダンジョン行くか」

こんなに軽くダンジョンに行くと言い出す人間なんて、彼くらいなものだろう。

「ちょっと行ってくる」

杖を片手に、家のお手伝いさんに声をかける。

「はい。お気をつけて」

ちよっと思って行く、の意味が分かっているお手伝いさんも軽く声をかけるだけにする。それが本当のちよっと思ってしまうとは違うこ

とを知っていても。
間違っても彼の実力を心配する必要はないだろう。敢えて心配する
なら寿命くらいか。

アストリウスにとってダンジョンは自分の庭とさほど変わりはない。
流石に60層以下だと今の彼では苦勞するが、40層ほどまでは目
をつむついても探検できる。

そんな彼がダンジョンですることと言えば、清掃、遭難者の救出、
ネタの仕入れ、とまさに老後の嗜み程度だった。

目の前にゾンビが現れば、聖なる光を放ってけん制するだけ。
スライムが現れば、自分を包む気温を低くして避けるだけ。
むやみに魔物を狩らない姿も現役を去った者の姿らしい。

「ほっほっほ、平和よのー」
ダンジョン内でそう思えるのは彼の他にはいないが。
その態度は、目の前に赤竜が現れても変わりはない。

赤竜からアストリウスに向けて吐きかける火炎を、杖をポンとついで
対処する。

そこにあつたはずの姿が突如消え、赤竜の背中へと姿を現す。

「ほっほ、簡単な空間魔法じゃよ」
言葉の伝わらない相手への丁寧な説明。当然相手も通じておらず、
翼を羽ばたかせて背中中の人物を振り落としにかかる。
そして、すぐに消える重み。

老人が今度は宙から飛び降りて、目の前に立つ。

「ほっほ、簡単な重力魔法じゃよ」
完全に手ごまにされる赤竜。

無我夢中で、いや激情にまかせてその巨体をアストリウスめがけて突進させる。

竜が走ると地面がゆれ、大抵の人間はその場から動けなくなる。

しかし、アストリウスはあいも変わらずニコニコとして、杖をポンと突く。

その途端赤竜の足元に巨大な穴が出現する。翼はあれど、予想外な穴に抵抗できず落ちていく。

「ほっほ、簡単な土魔法じゃよ」

とうとうこの落とし穴が赤竜の逆鱗に触れた。

真っ赤な鱗を沸騰させながら、穴から飛び出す。

しかし、目の前にはすでに逆鱗に触れてきた老人はいなかった。

行き場のない怒りを咆哮に変え、赤竜は全力で吠えた。

一方、近くの通路に逃げていたアストリウスはリズムよくダンジョンの散歩を続ける。

「あー、楽しかった。やっぱり赤竜くらいになると緊張感があつていいのぉ」

30層まで行ったら帰ろうか。執筆活動もまだ残っている。

そう思いながら、ダンジョンをウロウロしていると、変わった魔力の流れを感じた。

今まで何百回と降りてきたこのダンジョンだが、まだ新しい発見があることに驚き、すぐさまそちらへと飛んでいく。

もちろん大得意の空間魔法を駆使して。

アストリウスは多くの客と同じように、その不思議な扉を見ていた。ダンジョン内にお店が？流石の大賢者でさえこの光景は滑稽だった。

（本当はこの中に飛び込もうと思ったが、入れなかったのお。不思議なことばかりじゃ）
どうやらこの扉は魔物除けの効果があるだけでなく、結界の役割も果たしているようだ。

高度で、不思議な魔法回路。賢者の興味はますますそそられる。

扉を開ける魔法をかけてみるが、はじかれる。

手で開ければいいのだが、いちいち魔法で済ませないと気が済まないのが賢者の職業病だ。ていうか、悪い性癖だ。

「うーん、一体どんな結界が？触れるのが怖いのー」

あらゆる防御魔法をかけているから、それらが解かれるのではないかという不安がある。

それでも手で触れるほかに手段がなさそうだ。

恐る恐る扉の取っ手に手を駆ける。

「あー、悪い方に出たわい」

予想していた通り、全ての魔法が解除された。防御魔法から、もしもの自爆魔法まで全てを。

「いらっしゃいませ！ようこそおいで下さいました」

店の中には若い店主が一人だけ。

不思議な店だが、中身も見たことのないものばかり。

この年になってこんな新鮮な気分を味わえるとは。

それよりも取り敢えずは、魔法のことを聞いてみよう。

「不思議な結界がかかっておるようじゃ。魔物除けの赤い石も複雑な魔法回路が練りこまれておる。おぬしが作ったのか？」

「はて？なんのことでしょうか？」

全く知らないと言わんばかりに、頭を傾ける店主。
しかし、アストリウスは全く信じていなかった。
魔法で暴いたわけじゃないが、長年の経験からこの男が本当のことを言っていないことを見やぶいた。

「まあええわい。言う気がないならな。どうせここでは、ワシの力も及ばんし」
ブンブンとすねる賢者。

ポートルレイルでこんなことなど一度も経験したことがない。できないことは魔法で解決！それがモットーだけに、何もできない今は拗ねるほかなかった。

「それで、この店は何を営んでいるのかな？」

「ええと、何でも屋で通っています」

「何でも屋か。では、ペンとインクは置いておるかの？執筆用にしたい」

「ペンですね。いいものが入っていますよ」

店の奥へと引っ込む、若い店主。

その体に魔力をまとっているのをアストリウスは見逃さなかった。
ここの中で彼は魔法を使える。相手の魔法を完全に封じて、自分には一切の影響がない。

アストリウスはその事実には驚きを隠せないでいた。

（何たることか。この私をはるかに上回る使い手かもしれんのお）

長く伸びた髭を撫でながら、目をつむる。
表に戻ったら、また魔術の研究でもしてみようかな。
そんなことを考えながら待った。

店主が持つてきたのは、見たこともないペンだった。羽ペンを要求したら、よくわからない棒がきた。しかもインクも持つてきていない。

ペンには金色や、銀色の装飾が付いている。

見た目は鮮やかだが、触つてみると結構軽い。よくわからない素材でできていた。金や銀の装飾も触つてみると違う金属だとわかる。

「万年筆というものです。はじめは使いづらいですが、慣れれば良い相方になりますよ」

「マンネンヒツ？ワシはペンとインクを要求したのじゃが」

「はい、それで書けますよ。インクも今までよりはるかに長持ちすると思います」

簡単な説明を受けた。

ペン先にインクをつけずに、そのまま書けばいいらしい。

「魔法器具なのか？」

「いえ、中にインクが入っているんですよ。そのインクがペン先から出て、文字を書くことができます」

そんなことが可能なのか？こんな細い中にインクを？ズブズブに漏れ出しそうだが。

言われたとおりに、差し出された紙に書いてみた。

紙も上質でもつたないが、店主は気にも止めない。

もしや、このペンってかなり高額？だからサービスがいいのか？

ここ数年感じたことのない感情が次々と芽生えた。

紙にペン先を当て、いつもの文字を書いてみた。

滑らかで、インクが途切れることがない。

そのまま書き続けても、全くインクがなくなる心配がない。ついインクを付け直す癖が出る。そんなこと必要ないのに。これは便利だ。すごく便利だ！

「これを買ってくれ。あるだけ欲しいのだが、いいかの？」

「あー、あと三本しかないですが……」

「それでいい！」

「あ、インクの替えなら結構ありますよ。それもどうです？」

「インクは取り外し可能なのか？手がズブズブにならないか？」

「見てもらえばわかりますよ」

笑顔で店の奥へと商品をとりに行った。

これだけの上等品だ。一体いくら請求されるのだろうか。

孫の代まで遊んで暮らせる金はあるが、それでもちよつとだけ不安になる。

「あ、ワシ金持って来てねーわ」

いまさら気が付いてしまった。タダの散歩のつもりで来たのだ、まさかダンジョンで金が必要になるとは思っていなかった。

「はい万年筆3本と、インクの替えが30本。値段は、金貨10枚です」

「金貨10枚じゃと!？」

(安い!こんな便利なものをたったの金貨10枚!?)

「高いですか?でも仕入れ値も高く、それに結構長持ちするんですよ?書く量にもよりますが、インク一本で一か月は持つはずですよ」

「一か月持つじゃと!?!一か月ずつと書き続けられるというのか?」

「ええ、おおよそですが。インクがキレたらインクだけを交換して、また使用していただけますよ」

「では、ペンを3本も買う必要はないじゃないか」

「そうですね。では、ペン一本だけにしておきます?」

「いや、全部でいい」

金貨10枚でそれだけのクオリティが得られのなら、いくらでも買うつもりだ。

「ところで、金を持ち合わせていないので、今度来たときに支払いたい」

「ええ、構いませんよ」

丁寧な笑顔で、商品を包む店主。

普通はツケだと嫌がられるが、全くその様子はない。

「ワシが賢者で信用があるからか?」

「え?」

どうやらアストリウスが賢者だと呼ばれていることは全く知らないらしい。

嘘をついていないこともわかった。

流石に困り顔になるアストリウス。

「はい、商品です」

丁寧に紙袋に包み、手提げのビニール袋まで差し出す。

どこまでハイサービスで、どこまでハイ技術だ。ひたすら戸惑うしかない。

「よかったですら、ご飯食べていきませんか?ソバを打ったのです、料金は結構ですので」

しかも飯まで出してくれるらしい。

いまさら毒殺されても惜しくない身だ。

「ほっほ、御馳走になるうかの」

「では、休憩室でお待ちください」

指示された左手の部屋。

落ち着いた照明に、柔らかそうなソファー。

いつもは宙に浮いて執筆しているので、尻について座ったのは久々だった。

「柔らかいのお」

近くに水の入ったボトルが設置されている。よくわからないし、喉も乾いていないので興味はそそられない。

それよりも、棚にご自由にお読みくださいと書かれている書物が気になる。

……、読んでみようか。

書物のタイトルは『チャーシュー』だった。

なにかラーメンと言う食べ物の中の具らしい。変てこなタイトルだ。中身を開いて、早速読みだす。

内容は書物のように文字が並んでいるものではなかった。綺麗な絵が描かれ、キャラの傍にセリフが書かれている。

新しすぎる手法だ。なんだこの書物は。

そして、このチャーシューが使う忍術と言うのは何なのだ？

(面白い、面白いぞ『チャーシュー』！)

「どうやら楽しんでいただいているみたいですね」

気が付くと目の前に店主がいた。

近づく存在に気が付かないほど集中したのはいつ以来だろうか。

「チャーシューの使う忍術は、魔術とは違うのか？」

「えーと、同じと考えていいですよ」

「そうか。スズメオドシ先生は強いのに」

「はい、めっちゃめっちゃ強いですよ」

店主が持ってきたソバと言う食べ物すりながら、マンガという書

物を読み続けた。

ソバうまいな。ソバつゆにつけて、思いっきりすするとうまいのだ。ソバは上手いし、マンガも面白い。

40歳くらい若返ったくらい、ワクワクが止まらないぞ。

「店主、このマンガという書物を金貨100枚で譲ってほしい！」

「商品じゃないんですが……」

「200枚でもいい！全巻譲ってくれ！頼む、死にゆく老人の頼みじゃ」

「200枚もいららないんですが。まあいいですよ」

「次に来た際に必ず払う」

「ええ、それで構いませんよ。金貨200枚は多いですから、『ミニスカート』と『Avatar x Avatar』も持って行ってください」

「おおっ!?!」

実はそれも読みたくて気になっていたマンガだった。

それも譲ってくれるらしい。

しかし、それでは200冊ほどになってしまふ。

「ここではアイテムボックスが使えないから持ち運びできそうにもないな」

「扉の外に出ればアイテムボックスも使えますよ」

「やっぱり知っておるではないか。結界もやはりお前さんが作ったな」

「あっ……」

やってしまったと口が開くタケル。

語るに落ちる、まさか自分がそんなどんくさいことをしてしまつとは。

「まあ深くは追求せんわい。いい買い物をしたしの。よかつたら扉

の外までマンガを運んでくれ。そしたらアイテムボックスに入れて、
続きは家で読むとしよう」

「はい、わかりました」

店主の言う通り、外に出ると同時にすべての魔力が帰ってきた。

アイテムボックスもいつも通り使える。200冊のマンガもその空
間にしまっていく。

「ほっほ、いい経験をしたわい」

ダンジョンに住む人

タケルの妹、チサトはいつも通りのジト目で、口を三角形にしながら説明を受けていた。

「兄ちゃん仕入れに行ってくるからな、店番頼んだぞ」
「……、うん」

「お客様が入ってきたら、まずは挨拶。求めている商品があれば、店の奥からとってきてあげて。値段は一覧表にしてあるから。よくわからなかったら、次回の支払いでもいいから」

「……、うん」
「本当にわかっているのかな？」
「いまいちハッキリしない反応の妹に、タケルは少しばかりの不安を覚える。」

しかし、妹も既に高校2年生だ。いまさら接客の一つや二つ、任せといても大丈夫だろう。たとえここが変なお店で、変なお客が来ようと、やることはコンビニ店員とさほど変わらないはずだ。

「じゃあ、お兄ちゃん行くから。ちゃんと給料分の働きはしてよね」
「あい」

タケルは仕入れのための大きなバッグを背中に背負って、店から出ていった。

店に一人寂しく取り残されるミサト。

いつもタケルが座るカウンター内の席に腰を下ろす。
うん、座り心地のいい椅子だ。気分はいいが、ミサトの表情は変わらない。

大きなイスに、小さな体。一人だけの快適な空間。

ミサトは少しだけ女王様気分を味わえた。それでも一向にジト目、三角形の口元は変わらないが。

ミサトは時給3000円を貰って、ほとんど座っているだけと言う最高の仕事を得た。

外でこんな楽に稼げる仕事はないと知っている。だから、最低限の仕事はこなす。

でも、お客が来ていないので、とりあえず携帯を取り出して暇つぶしをするのだった。

ダンジョン内で暮らす男。

ケルヴィンはそう呼ばれていた。たまにダンジョン内で出会う人間たちが彼につけた通り名だ。

元は家名をもった立派な領地持ち大貴族の跡取りだった。

しかし、弟と揉めに揉めたお家騒動を経たのちに、疲れた彼は俗世を捨てた。

出家なんて文化はなく、家も金も弟に奪われた彼は剣一本でダンジョンへと入る。

それが30年も前の話である。

ケルヴィンはダンジョン60階層を拠点としていた。

剣一本で、水竜がでる区画を生き延びる。常人じゃ到底まねできないことだ。

でもケルヴィンはここでの生活を気に入っていた。

誰の顔を窺うこともない。目の前に魔物が現れれば、殺すか殺されるか。

至極単純な世界だ。

魔物を倒せばそれが自分の血肉となる。

そう、ケルヴィンは魔物を食していた。あまりいい味ではないが、

活力を得るには魔物の肉も悪くはない。

それに、良く行くあの店から買う“マヨネーズ”をつければ大抵の肉は食えた。臭い肉も、堅い肉も、マヨネーズさえかければ。ケルヴィンはマヨネーズに絶対の信頼を置いていた。

「さてと、そろそろお腹が空いてきたな」

寝起きのケルヴィンは、さっそく今日の朝食を考えていた。

表の世界で食っちゃ寝の生活をしていたら、誰かしらから間違いな
く文句を言われるだろう。

しかし、ダンジョン内ではそんなことはない。食った後は寝る、他
にやることもないのだ。

むしろ食っちゃ寝生活がスタンダードですらある。

今日のご飯は何かなー。

ケルヴィンが選ぶまでもなく、その水竜ちゅうりゅうが現れた。

60階層一体に出現する、水竜。神秘的な輝きを放つ水色の鱗はし
なやかな柔らかみを持ち、長い口先を持っているのが特徴だ。

一見その体の細さや、あまり獰猛な声を上げないことから弱い竜と
思われがちだが、それは全くの見当違いだ。

このダンジョンで赤竜の次に冒険者を葬っている竜と言っても過言
ではない。

水竜の移動はダンジョン内を滑らかに滑って移動する。この変則的
な動きが、多くの冒険者が苦手とする原因だった。

ついさつきまで遠くにいたと思っていた水竜が、ゆったりとしたモ
ーションから一気に距離を詰めてくる。初めて体験した者はまず反
応できないだろう。

しかし、ケルヴィンはいともたやすく剣で相手の鋭い口先を受け止
める。

10メートルはある水竜を正面から、すべての衝撃を受け止めた。こんなことができるのも彼くらいだろう。なぜなら、彼は人類史上最も水竜を狩って生きているからだ。環境と、状況がそうさせたただけだが。

「決めた。朝からこいつだと結構胃にガツンとくるが、お前を食べることにした」

そう言い終わり、口先を払いのけ、竜の首筋に剣を叩き込む。

しかし、又ルリと剣が滑り、首が剣で斬られることはなかった。

これも水竜の強みだった。

特殊な鱗は簡単に刃物を通さない。見極めなければならぬ、一体一体の特性を。

「いやー、寝起きで相手をするレベルじゃなかったね」

後悔しても遅かった。この竜は既に激情をもってケルヴィンに襲い掛かってくる。

先ほどの剣は完全に外れたわけではなく、綺麗な鱗を一枚はがしていたのだ。

水竜は鱗を大事にする竜であるため、もうケルヴィンを逃がすことはない。

どちらかが死ぬまで、この戦いが止まないことが決定した。

ケルヴィンの、ダンジョン内での食っちゃ寝生活はいつもこんな風だ。

常に死と隣り合わせの生活で、食っちゃ寝生活をしている彼を責められる人間などいないだろう。

ケルヴィンは今日も帰る場所などなく、今日も生きていくために目の前の強敵と戦う。

ケルヴィンと水竜の戦いが済んだのは昼頃だった。

思ったよりも強い個体で、かなり苦戦した。

大事に使っていた剣も折れている。かなりいい剣だし、魔法で強化もしている。

それでも強化した体から放たれる無数の斬撃と、強敵からの攻撃を防いでいるうちに限界が来たようだ。

そつと一言お礼をいい、その剣をダンジョンの地面に突き刺した。

ケルヴィンが良くやるお祈りみたいなものだった。

「さてと、お前を食うとしよう」

ケルヴィンは解体用のナイフを取り出すと、慣れた手つきで竜を解体していく。

解体した個所からマヨネーズをかけて口に入れて、咀嚼していく。

固いので何度も噛みながら、その間にも解体を進めていく。

そんなことをしながら何時間も、何時間も経過する。

辺りに魔物は集まれど、見慣れたケルヴィンに進んで襲い掛かる魔物もない。この辺りじゃ、水竜以外はケルヴィンをおそろいしい魔物だと認識していた。弱い魔物が強い魔物に襲い掛かることなんてないのだ。

ケルヴィンが水竜のすべてを平らげた時、その世界では夜を迎えていた。

朝起きて、殺して、昼から食べ始めて、夜になるのだ。

これがダンジョン内での、生活のスタンダード。

ケルヴィンにこの生活の疑問はないし、むしろ何も考えなくて済む分気楽で、幸せであった。

水竜の食べられない魔石と、牙、爪を皮製の手提げバッグに詰め込むと、その場にあおむけになり、ケルヴィンは夢の世界へと入っていった。

隠れることはしない。強者だからだ。
誰もはし襲いはしない、弱者だからだ。至極単純な世界だ。

ケルヴィンは魔石や、金になる素材をちゃんとはぎ取っていた。
外の世界と縁を切った彼には関係のないもののように思えるが、ダンジョン内にも実はお店がある。

ケルヴィンは竜のダンジョンに30年も住んでいる。
もちろんその存在を知っていた。

彼はそこで買い物をするために、金になる素材を集めているのだ。
その店主のことは嫌いじゃない。

人間関係が煩わしくて逃げてきたダンジョン内だが、不思議と店主のタケルとは心の壁を感じない。

もちろん彼が、商売人として対応してくれるから余計な気を遣わなくていいのはわかっていいる。それだけじゃない、ケルヴィンはタケルのことが結構好きだった。

きっと外の世界にいた頃、まだ人間だった頃に出会えたら友になれていた気がする。

それはもう、想像でしか実現しないことだが。自分はもうダンジョン内で生きる孤高のトラだ。しかし、そんな未来があってもよかった。

ケルヴィンはそんな夢を見ながらだろうが、綺麗な寝顔でダンジョンの一室で眠りについた。

目が覚めると、真っ先に29階層めがけて突き進む。

以前行つたのはどのくらい前だったか。半年前かな？うーん、思い出せない。

こちらに来てからは、時間の概念もあいまいになりつつある。

久しぶりに会うタケルのことが楽しみだった。剣が折れたので、タケルが作った新作の剣を一本買おう。それにマヨネーズも底についている。また大量に買おうか。

色々と考えながら、ケルヴィンを知らない魔物を葬って、懐かしの扉の前に立った。

「変わらんのぉ」

また扉を開けたら、眩しい光が目さすのだろう。それにあの不自然な涼しい空気。

タケルも笑顔で出迎えてくれるだろう。

ちよつとだけドキドキしながら、失われた心が戻ってくるかのような気持ちで、ゆっくりと扉を開いた。

(…………、あれ！？聞き慣れた、いらつしやいませ、の声がない)店の前の立て看板にはちゃんとOPENと書かれていたはずだが。

タケルはいないのか？

いつもタケルが座っているブラックレザアの椅子には、なぞの少女が座っていた。

ジト目で、じーっとケルヴィンを窺う。口はずっと三角形のままだ。

「あ、あれ？お嬢ちゃんは誰かな？」

「…………」

チサトは答えない。実を言わなくても、人見知りなのだ。

ケルヴィンは戸惑った。

目の前にいるのは間違はなく少女、決してただの屍ではない。では、なぜ返事をくれない？

自分が外の世界にいた頃、こんな失礼なことをする人間はいなかつ

た。

彼女の綺麗な身なりを見る限り、タケルと同じく育ちがよいのだろう。

そんな育ちの良い彼女が、あいさつ一つしないだ！？

水竜を前にしても、一步も引かないケルヴィンが、今物凄く狼狽していた。

「あの、タケルはいないのかな？」

チサトは目の前の男が怪しい男ではなく、ちゃんとした客だと認識した。

汚いが、危険ではないらしい。きちんと兄と知り合いのようだ。

高い時給も貰っているので、面倒くさいが接客をしなくては。

チサトは手に持てるサイズのホワイトボードを取り出し、水性マジックで文字を書きこむ。

『タケルは仕入れに行った』

人見知りのチサトは他人とあまり話したがらない。相手が、血だらけ、泥だらけ、傷だらけの男だと、なおのこと。

「あん？すまねえな。長いこと社会と関わってないから、文字を忘れてしまった。読めねーんだ」

「ちっ」

苛立ちを素直に舌打ちという形で示し、チサトは次の作戦を考えた。一体どうやって接客しようかと。言葉を話せばいいのだが、彼女の頭にその選択肢はない。

とりあえず、顎をあげて、偉そうにしてみた。

何が欲しいんだ？言ってみろ、のポーズだ。

そのボディランゲイジは、以外にもケルヴィンに通じた。

「あ、ああ、ちゃんと商品は売ってくれるんだな？」

肯定の意味を込めて、チサトが頷く。

「剣とな、マヨネーズがいるんだ。剣はタケルが作った一番いいやつを頼む。マヨネーズはあるだけ全てだ」

(マヨラーかよ!?)

という、チサトの心の声は世に出ることはなかった。

ゴリゴリのアウトドア派かと思いきや、まさかマヨネーズをチューチュー啜る野郎だったとは。

チサトは一気に目の前の客を格下げした。

それでもお客だ。

兄のタケルから要望があつたら、取に行けと言われている。反故にはできない。

イスから腰を下ろして、店の奥へと引っ込んでいく。

マヨネーズは確か段ボールで数箱仕入れていたのを見た。

どこかにあるはずだ。

兄がキモい買い物をしていると思っていたが、あいつが元凶だったか。

マヨネーズの入った段ボールはすぐに見つかった。

なんと段ボール3箱もある。

バカかよ。チサトの感想はそれだけだった。もう興味を注ぎたくない。

マヨネーズを何に使うんだよとか想像したくない。

ダイレクトに口に入れる姿とか、もう想像したくないんだ!!

ひと箱、ひと箱ケルヴィンの元へと運ぶ。

「むっ!!」

たかがマヨネーズの分際ですごく重かった。

一日の使用筋力量の三分の一を持っていかれた。チサトは謎の敗北感に染まった。

マヨネーズに負けてしまった。

「おおっ!こんなにも。タケルが気を遣ってくれたんだな。いやいや、ありがたい」

『はよ帰れ。マヨラー』

相手を読めないと分かっているので、せこい攻撃をするチサト。兄に見つかったら間違いなく怒られるが、その兄は仕入れていないのだ。

「だから文字はわからんのだ」

言うケルヴィンを無視して、今度は剣をとりに行く。

百本近く置いてある剣の部屋を散策する。一番いいやつと言われたが、いまいちわからない。

取り敢えず値段票を見て、一番高いやつがいいものだと決めて、それをケルヴィンへと渡した。

「おおっ!?!これはまさに業物だな!手に持った瞬間にその良さが伝わった。制作者のタケルの顔も見えるいい剣だ」

「……………」

チサトは手のひらを差し出す。

金を払えの意味だ。

剣は金貨400枚。マヨネーズは価格表にない。まあ金貨3枚くらいでいいだろうと目分量で決める。

『403』

「ああ、金か。ほれ」

ケルヴィンが差し出したのは、大量の魔石と素材たち。仰々しいその物体たちに肝を冷やした。

「うっ!？」

ケルヴィンの前で初めて出した声。

「必要な分だけとっていつてくれ」

そう言われたが、まさかこんな支払い方をしてくる客がいるとは思ってもいなかった。

物々交換ではないか。

一体このキラキラ光る石はどれほどの価値があるのか。

金貨にしたらいくらになるのか。

……、わからない。価格表には乗っていない。

価格表には自分のとこの商品の価値しか書いていないのだ。

『全部おいてけ』

「だから、わからないんだよ」

ならば行動で示すだけ。素材の入ったバッグを受け取り、中身をすべて近くにあった空の水差しの中に流し込んだ。

そしてバッグを返す。

「おお、終わったか。じゃあ、俺はいくぜ。またよろしくな」

「……」

マヨラーは去った。一息つくチサト。

どうやら金勘定はあれであっていたらしい。

兄が信頼してマヨネーズをあれだけ仕入れていたのだ、あの素材たちはゴミ屑じゃないはずだ。

「おっそうだ。あんた名前は？タケルと関係あるのか？」

扉を少しだけ開き、マヨラーが戻ってきた。

『妹よ。マヨラーさん』

「へっ、最後まで変わっているな。まあタケルと目元が似ている。」

妹かなんかだろう?」

『正解!』

正解ついでに、マヨラーを少しだけ止めておく。
冷蔵庫からツナ缶をとって来て、それをマヨラーに投げつけた。
ばしりと受け取り、何かと見やるマヨラー。

チサトはそれにマヨネーズをかけるジェスチャーをする。

「ああ、言いたいことがわかったぜ」

ケルヴィンとチサトの通じないようで、通じるやり取りを終え、二人はもとの生活へと戻る。

しばらくして、兄のタケルが戻ってきた。

大漁におかしなものを背負って。

一体どこに仕入れに行っていたのだ。見たことないものばかりだった。

「どうだった? なにかトラブルは?」

「ない」

「そうか。それは良かった。はい、8時間分の給料で、24000円ね」

いいバイトだ。またやろうと思うチサト。

「今日は誰が来たの?」

「汚い人」

汚い人と聞いて、色々思い出すタケル。

在庫のマヨネーズがなくなっているのを確認して、ある人物が出てきた。

「ああ、ケルヴィンさん? 剣とマヨネーズを買って言ったでしょ」

「うん」

「そうかそうか。半年ぶりだね」

「お金。水差しの中」

「わかった。ありがとう」

タケルは水差しから、素材を取り出す。そして、その量の多さに驚いた。

「こんなにもか。貰いすぎているなあ」

「……」

「まあチサトが商売上手ってことかな」

そう言っつて、妹の顔を撫でるタケル。

口元だけ笑い、目はジト目のままの妹が不気味に微笑んだ。

一人ばちばちと手を叩き、自賛する。

楽しかったから、またやろうと胸に決め、チサトは部屋へと戻るの
であった。

ダンジョンに住む人（後書き）

妹回です。

たまに使ってやるかと思っています。

貴族御用達です

ルリーズ・シモーネはぽつちやり系金持ちで、生まれ持ったの勝ち組だ。

それもただの成金ではない、王室誕生時から続く由緒正しき貴族の一員。

このポートルレイルで多くの利権を持った、泣く子も黙るシモーネ家の次男坊だった。

彼の街での評判はよろしくない。

彼を中途半端に知る人で、彼のこと良く言う者はあまり多くない。

何も権利を振りかざして弱者を痛めつけているとか、危ない薬に手を出し常にフラフラとかそんな状態ではない。

むしろ、その顔色は明るく、すれ違う知人にはきちんと挨拶をする好青年だった。

それなのに評判がよろしくない。女性にモテない。親には期待されていない。

なぜなら彼は、“バカ”だからだ。

ルリーズは貴族でありながら冒険者としてギルドに登録していた。

その彼が、自身も冒険者だというのに、月に一度だけギルドに仕事の依頼を出す。

『冒険者10名を募集する。目的地は竜のダンジョン地下29階層』

定期的に張り出されるこの仕事依頼は、大変人気の仕事であった。

報酬は金貨20枚。ダンジョン内でとれた素材は全て取った者が所有する。つまりは受注者である、冒険者10名のものだ。

ルイーズはそれなりに腕の立つ男だった。足手まといにはならないし、それ故過度な護衛も必要はない。更に、ルイーズの側に仕えている一人の護衛は凄腕だった。場合によつては彼が助けしてくれることすらある。

こんな美味しい仕事はめつたになく、冒険者たちはこの仕事を巡つてたびたび争っていた。

そんなことがあるので、ギルド側から抽選で毎月仕事を受注する10名を決めている。

その幸運な10名が待つなか、ルイーズがギルドにやってきた。隣には歴戦の強者である、護衛を一人従えて。

この12名で、彼らは竜のダンジョン29階層を目指す。

この仕事はある程度の実力が必要になるため、あらかじめ冒険者のレベルは絞られている。

そのため、出会いたて10名の拙い連携でも、彼らはなんの苦も無くあつという間に20階層へと着く。

今日はここで夜を明かす。明日の昼頃に目的地である29階層に着くだろう。

魔物の出づらい区画に簡易の寝所を作り、彼は各々体を休ませる。自分の持ってきた携帯食を食べ、心と体を癒していく。

ルイーズの護衛、アーヴァインも同じように食事を摂っていた。

ルイーズはその姿を恨めしそうに見ている。

「食べたらいじやないですか」

「馬鹿め。空腹は最高のスパイスなのだぞ」

「そうですか。ならそんな目で見ないでください。食べづらいので」「ぐぬぬぬう」

護衛から注意されるが、それでも執拗に見続けるルイーズ。貴族出身の彼に、飢えるという経験は非常に苦しいものだった。それでも、今は耐えなければならぬ。この先にご褒美が待っているからだ。

「大体、そんなに美味しいですかね？ 私にはどうもわかりませんよ」
「ふん。庶民の貴様にはわからん味よ。我ほどの高貴な存在だと、逆にあの珍味に惹かれるのよ」

「はいはい、そうですか。じゃあ、お腹を空かせて苦しんで寝てください」

面倒くさそうに、アーヴァインが嗜め、彼は食事を終えた。そして、すぐに眠りに着く。あくまで彼は護衛だ。常に体調を万全にする必要がある。

ぐーすか眠る護衛の隣で、ルイーズは眠れないでいた。空っぽのお腹が、食べ物を求めて脳に信号を送り続ける。その信号が彼に眠りを与えてくれない。

（ああ、お腹がすいた。タケル殿……）

お腹をさすりながら、ルイーズは目をつむった。

ルイーズが冒険者たちを雇って、ダンジョンに潜るのには理由があった。

表向きに、多くの者が知る理由は、少し事実と違う。

ルイーズはダンジョン内でとれた魔物の素材を、仕事の受注者たちにすべて渡している。

29階層ともなると、赤竜の素材も取れるので結構な金になる。

しかし、ギルドの成果報告には、それらは全てルイーズの手柄として記録されている。

だから皆勘違いをする。彼は楽しんで冒険者としての名誉が欲しいのだと。

日常に飽きた貴族の道楽程度にしか思われていない。

バカな貴族が、金をばら撒いて名誉を買おうとしている。

彼の評判の悪さはそこから来ていた。

しかし、事実は違う。彼はその行動をフェイクとして使っていた。自分の真の目的を知られないために、彼が打った先手だったのだ。

全ての目的は、地下29階層にあるあのお店へと行くこと。そして、あそこで自分の欲求を満たすこと。

他人に知られたくないのは、あの場所を大衆店にしてしまいたくないから。

貴族的な、選民意識が彼の行動の原理だった。

「……さま。ルーズ様、出発しますよ」

護衛のアーヴアインに起こされて、ゆっくりと目を開けた。

深い眠りだった。どうやらもう一晩明かしたらしい。

寝る前は腹が減っていたが、起きたら既に空腹はない。

ああ、いつものやつだ。

空腹の向こう側、医者は血の中の糖分が安定するからとか言っていたな。

「もう朝か」

「ええ、どうですか？まだお腹は空いていますか？」

「いいや、むしろ体の調子がいい。お前もたまにやってみるといい。不思議なものだ」

「ええ、わかりました」

ルーズの好調さに引かれてか、一行の残り道も順調だった。

いよいよ29階層で赤竜と遭遇するが、今回の10名は優秀らしく、

あまり苦としなかった。

魔物の出ない一角に、10名に待機を命じる。連れていくのは護衛のアーヴァインだけ。

10名は言われたとおりに待機するが、やはりその怪しい行動を噂する。

なぜルイズはいつも29階層までしかいないのか。

なぜいつも二人でどこかへ消えて、2、3時間後に戻ってくるのか。

大方の見解は出ていた。

ルイズは29階層で採れる、蜜を生で食べているのではないかと。

いつもルイズが消える辺りには、ダンジョンの壁から太い根を出した植物がある。

その植物の根からは、不思議な蜜があふれており、これが独特な風味を持っていてなかなかうまい。

もちろんポトレイルでも買うことは出来る。

しかし、やはり採れたてよりは味が落ちる。

つまり、ルイズはその蜜の大ファンであり、それを知られたいくないがために隠れて蜜を舐めているのだというのが最有力の見解だ。

あながち大外れでもないのだが、彼らはその結論で満足していた。

ルイズとアーヴァインは一か月ぶりに扉の前に立っていた。

変わらぬ精巧な作りの扉と、綺麗な赤い魔石。

店はいつも通り、OPENとなっていた。

「では行ってくるぞ。お前は本当に今回もいいのか？金ならお前の分も出してやる」

そう言われるが困り顔になるアーヴァイン。

「いえ、私にはわからない味ですので。妻の料理の方が好きでして」「そうか。ではタケル殿に挨拶だけでも」

「いえ、それも……。私はこちらの方が苦手なですよ。なんとというか、化け物染みたものをその姿に見るのです。いやはや、思い出すだけでゾッとします」

「アーヴァインほどの男が何を言っておる。父はお前より強い者は、最強の騎士キーラ・スフィアくらいだと言っておるぞ」

「まあその話はまた今度。ルーズ様は私に気兼ねなくお楽しみください」

「そうか、すまぬな。ではしばし待っている。私は月に一度の席を存分に味わってくる」

扉へと消えていく主を見守るアーヴァイン。

アーヴァインは知っている。己の主が、自分の娯楽をつぶさないために頭を働かせていることを。彼は決してバカなんかじゃない。きちんと計算のできる男だ。

しかし、アーヴァインは同時に知っている。

己の主が、天然バカだと。

扉を潜り抜けた先には、ルーズが要望していた通りの環境が整っていた。

冷房の温度は普段より少し低めに。

照明はいつもより強く。ちなみにこの日だけタケルは証明をLEDに変えている。

更に店はいつもより念入りに磨かれて、ホコリ一つない。

「うむ、いつも助かる。タケル殿」

「いえ、大事なお客様ですので」

「ありがとう。では、いつものコースを頼むよ」

環境に満足したルイーズは、いつもの休憩室へと向かう。彼がお気に入り、和風テイストの腰かけイスが特別に用意されている。

全ては彼の要望から作られている環境だ。その分の対価は用意している。

待つこと1分。店主のタケルが、いつものコースを持ってきた。非常に申し訳なさそうな顔をして。

「前菜のコーンフ레이크、ミルク入りでございます」「うむ」

タケルは非常に申し訳なさそうな顔でその場を去る。次の支度がまだあるのだ。何せコース料理は始まったばかり。

冷静に受け答えしたルイーズだったが、その内心実はもの凄く心が踊っていた。

(これだ。これを待っていたんだ)

スプーンでコーンフ레이크を掬い、口に運ぶ。

これだ。これなんだよ。この珍味を求めてやってきたんだ！

チープな味がルイーズの下には珍味として映る。

貴族が皆そうなのか、ルイーズだけがそうなのかはわからない。他に貴族の客がいないからだ。

綺麗にコーンフ레이크を食べ終え、残った甘みが混ざったミルクも飲み干す。

チープな味だ。しかし、珍味。

すきつ腹に程よい刺激を与えた。今日も絶好調でメインを迎えられそうだった。

食べ終えたと同時に、タケルが次の料理を運び入れる。

「竹屋のコールスローです」

「またもチープだ。」

「多すぎる対価を貰っているタケルは非常に申し訳なさそうな顔を
する。」

「これでいいのか？と。しかし、客が求めているのだから仕方がない。」

「うむ。今日もいい出来よの」

「洗われすぎて、もはや野菜の成分の大方を失ったサラダを食べながら
ルーズは唸る。」

「珍味だと。」

「わかめスープです」

「インスタント。一袋当たり21円の代物。」

「数々の高級スープを飲んできたはずのルーズであるが、その顔は
恍惚としている。」

（珍味最高だ）

「菓子パンです」

「甘い！」

「ダイレクトに突き刺してくる甘み！珍味である！」

「サバ缶です」

「スーパーアイスです」

「珍味たいぎである！」

「メインのカップラーメンでございます」

「いつもこの頃から状況に慣れだすタケルが、お湯に入れて2分30
秒経ったインスタントラーメンを持ってきた。」

「来たか！カップラーメン！」

このお店で食べられる珍味の中でも、もっとも好物であるカップラーメンが来た。

ルイーズは鼻の穴を大きくして、漏れ出す湯気を嗅ぐ。

うん、いつも通り効きすぎている塩分の香りがする。

よくわからない、危なそうな香りもする。

きつと体に悪いだろう。しかし、珍味を愛する自分の腕は止まることを知らない。

カップを片手に持ち、フォークで麺を絡めて、ズルズルと口の中に入れる。

うまい！こんな味、ここでしか味わえない。

きつと屋敷の料理人に頼んでも、この味は出せないのだ。

だから一生懸命、全神経を集中して味わう。

あっという間に終わる幸福の時間。

醤油味のカップラーメンはその汁も残すことなく、貴族の体へと消えていった。

（あー、美味しかった）

食べ終え、満足感に浸っているルイーズにいつもの衝動が襲いかかる。

カップラーメンのスープまで飲み干す彼は、いつもメインの後に急激な喉の渇き襲われる。

感じるとほぼ同時に、タケルがドリンクを持ち出す。

「コーラです」

氷が大量に入ったギンギンに冷えたコーラ。

ジャンクなカップ麺を食べた後に、冷たいコーラを一騎飲み。

ルイーズの最も好きな流れである。

ゲップと息を吐きだすと、彼の気持ちは落ち着いた。

今回もいい思いができた。炭酸で膨れたお腹をさすりながら、ジャンクな味を思い出す。

濃い。甘すぎる。危ない味もする。でも、珍味である。思い返し、決める。また来月も来よう、と。

「タケル殿。今日の分だ。金貨30枚入っている」
ジャラジャラと大量に金貨が入った袋を渡す。

「もっと減らしてくれてもいいんですよ？」

「いつも言っている。こんな珍味はここでしか食べられない。私は満足している。受け取るがよい」

罪悪感に苛まれながら、タケルは金貨を受け取った。

タケルの大変な一日が終わった。

ルイズにとつての幸せな一日も終わった。

手土産のポテトスライスを片手に、ルイズは自分の街へと戻っていった。

売れない商品もあります

犬耳少女はポートルレイルで疎まれていた。

メヴィーは今日も蔑みの視線を感じながらポートルレイルの街を歩き来する。

半分人間、半分獣の獣人は、このポートルレイルでは一様に肩身の狭い思いをしている。

特に具体的な理由がある訳ではないが、純血の人間たちは彼らを見下す傾向にある。

思春期真っただ中のメヴィーはそう言った感情に特に敏感だ。

いつも夜になると考えることがある。いつかは差別のない世界に行きたいと。そこで混じりけのない純粋な気持ちをもった男性と恋をしたいと。

獣人の彼女はそんな夢をみながら、今日も真面目にダンジョンへと潜る。

一緒に行くのは、唯一の友人でもあるハーフェルフのトゥウエイン。

彼女たちはまだ少女だが、獣人は人より力が強く、ハーフェルフは人より魔力が強い。

蔑まれている彼女たちだが、冒険者としては一流だった。

前衛のメヴィーと後衛のトゥウエイン。非常にバランスが良く、性格の相性も良かった。

明るく気の強いメヴィーと、一歩引いた性格のトゥウエイン。

彼女たちは出会うべくして出会ったのかもしれない。
そんな彼女たちは、ダンジョンで暇さえあれば恋の話に花を咲かせる。

具体的な相手はいないので、いつも理想の相手をそれぞれ語るのが定番だ。

「アタシは、マッチョがいいなあ」

「ええー、マッチョは何だぞ嫌だな」

今日のテーマは理想の男性の体型みたいだ。

「じゃあトウウェインちゃんはどんな体型がいいの？」

「うーん、やっぱりスラリと細長い系がいいかなあ」

「でもそのじゃ、ちゃんと守ってくれないかも」

守ってもらう必要があるかは別として。

「いいの。魔法が使えればいいのよ」

二人の着地点のない会話は、魔物と遭遇するまで続く。

なんてことない魔物の場合、そのまま会話が続くことさえある。

そして、今回の相手はなんてことのないゴブリンが相手だった。

年頃の女の子の恋話はそれほどのポテンシャルを持っている。

話しても話してもネタが尽きることはない永久機関なのだ。

「でも、もし接近戦に持ち込まれたら不利でしょ！」

ゴブリンを剣で斬りつけながら、メヴィーは会話を続ける。

「もしもすら与えないほど、その人は魔法が強力なの！」

こちらは風魔法でゴブリンを吹き飛ばしながら、いもしない相手の話をする。

こんなユルユルなノリで、彼女たちのダンジョン探検が始まる。

二人は思う、もしかしたらダンジョンに潜っているときが一番幸せなかもしれない。

だれの視線も気にすることなく、己の力をふんだんに使える場所。ダンジョンはシンプルですごくわかりやすい世界だった。

「そういえば、エルフって魔物の言葉を聞くことができるんじゃない？」

ふとした合間にメヴィーがそんなことを聞く。

「ん？ああ、本家はね。私はハーフエルフだからそんな能力はないよ」

「そうなんだ。もし聞けたら話してみたいことがあったのに」

「何を？」

「うーん、ダンジョンの生活はどうですか？とか、たまには仲良くしましうかとか」

「変なの」

獣人故に思うことなのだろうか。

トウウエインにはわからない価値観だった。

二人はダンジョン内で他の冒険者に遭遇した場合、避けて通ることが多い。

高い確率で蔑まれるから、その前に避けてしまえと言う魂胆だ。

だからいつも二人は王道ルートを通らない。

今日も細道の、奇襲に遭いやすい道に行く。

「メヴィーちゃんの鼻があるから、いつも助かっているよ」

トウウエインの言う通り、彼女らが危険な道を通っても無事でいられる理由に、メヴィーの鼻の良さがあった。

およそ犬と変わらないその嗅覚はダンジョンの隅々まで匂いを嗅ぐことができた。

どこに魔物がいて、どこに危ないガスが噴き出す区画があるか、彼

女の嗅覚によつて未然に防いできた。

獣人とはこのように、何か大きく能力が優れている場合が多い。メヴィーの場合、人間より力が強く、嗅覚は犬並み。

劣っているどころか、人間にすべての面で優っているとさえ言える。それなのに、表の世界では扱いが悪い。僻みや、妬みもあるのかもしれない。

「トウウェイんちゃんの光源魔法も役に立っているよ」

「いえいえ」

褒め合う二人。

トウウェイんは魔法が得意で、光を継続的に出す光源魔法は何かの片手間にすることができる簡単な魔法だった。

光は二人の周りを照らし、遭遇した魔物の視界を妨げる効果もあった。

何度も思う、自分たちは相性がいいのだと。

きつと肩身の狭い世界じゃなくても、この相手とは友達だったに違いないはずだと思う。

仲のいい二人は一緒に夜を明かし、今回の一応の目的地である地下30階層付近まで来ていた。

そこで出会った赤竜を狩る。

二人にとっては今更な相手だった

戦闘が始まると、前衛後衛にわかれる二人。

息のあったコンビネーションで相手を攻め続けるうちに、次第にバランスを崩していく赤竜。

赤竜が冷静さを失うと、彼女たちはいよいよ本気で牙をむく。

10メートルもある巨体をメヴィーが蹴り上げ、弱点である腹が見えると、トウウェイんの鋭い氷魔法が鬼のように連射される。

柔らかい腹に付き立つ無数の氷の柱。

それでも完全に息を失わない赤竜を、メヴィーが鉄拳をもって叩きのめす。

連打、連打、連打のラッシュ。魔法で強化した拳が無数に降り注がれる。

そして荒々しく、無残な死体がそこには残る。

彼女たちが戦った後はいつもこうだ。

一言で言うと、汚い。

殺し方が豪快で、死体がむごいことになるのだ。

獣人やハーフェルフたちは、ポートルェイルの街で蔑みをもって見られている。

ただし、メヴィー、トゥウェインを見る人たちの目は恐怖に染まっていることを彼女たちは知らない。

「はぁー、スッキリした。ポートルェイルでためたストレスはこうして発散するのが一番ね」

「そうですね。私も久々に連射してスッキリしています」

むごい死体の側でニコニコと笑う二人。

ここに他の冒険者がいなくてよかった。

彼女たちがますます孤独になるところだったからだ。

今回の目的を終えた二人が、素材をはぎ取り、さっさと家路につく。帰りたくなくても、危ないダンジョンでウロウロしているよりかはマシだ。

メヴィーの鼻と、綺麗な光源が彼女たちを導き、上の層へと登らせ

る。

地下29階層。

ピクリ、とメヴィーの鼻が反応する。

「あつ、この先冒険者いるよ」

「うっ、避けよっか……」

今回の探検では初めて遭遇しかけた冒険者たち。

一組くらいなら会っても大丈夫かと思っただが、会わないことに越したことはない。

嫌な思いはしたくないのだ。

「もう一つの道は魔物がウロウロしているから、ちょっと逸れた道に入るけど大丈夫？」

「うん、そうしよう」

こうして二人は初めての道を行くことになる。

広いダンジョンだ、知らない道が多いことは周知の事実だが、二人は不思議な場所に出してしまう。

綺麗な形をした扉に、赤い魔石がはめられている。立て看板にはOPENの文字が。

「メヴィーちゃん……」

トウウエインが心配そうな顔をメヴィーに向ける。

メヴィーは頭をぶんぶん横に振って、意志を伝える。

トウウエインはメヴィーのことを心配したのだ。

彼女の鼻がこんな人工的なものを捕え損ねるはずがなかった。

人を避けている自分たちだ。先にメヴィーからの忠告が入ってもお

かしくない。

しかし、メヴィーが首を横に振った意味は、匂いがしなかったということだ。

二人は不気味なその存在に戸惑った。

一歩、後ずさりするメヴィー。

トウウエインの目を見て、ここは立ち去ろうと言つ決意をした。

その時だ、警戒していた扉が開いた。

ガチャリと音がすると、中から人が出てきた。

黒髪で、黒目をした、薄暗いダンジョン内でもわかりやすい格好をした男だった。

「さてと、今日のサービスご飯のメニューを貼っておきましょうか

……、あれ？お客様ですか？」

ブツブツとつぶやいていた男が、二人の存在に気が付いた。

「え、いや、違う」

「違うんですか？いやー、でもせっかくだし、寄っていきませんか？実は、結構暇でして」

二人は顔を見合わせる。

不思議な場所に、不思議な男。そして、自分たちを招き入れたいらしい。

二人は更に戸惑った。

そんなことを言う人間は、ポートルレイルにはいないからだ。

「今日から、サービスご飯のメニューを看板に貼ることにしました。そのほうが入りやすくなつて」

こんなとこまで来る客が、そんなことを気にするか？という二人の疑問は口に出ることはなかった。

「ささ、どうぞ入って。お腹空いているでしょ？」
再度顔を見合わせる二人。
腹は減っているが、本当にいいのか？

「私たちが入ってもいい店なのか？」

「はい？」

タケルは間抜けな顔になった。

客が入ってはいけない店などあるのだろうか。
本気で不思議な気分だった。

「だから、私たち獣人と、ハーフェルフが入ってもいいのかと聞いている」

「もちろん。え？なんかおかしいです？」

メヴィーは逆に腹が立った。

自分たちが差別されて、入れてくれないと思っていたのに、目の前の男は全くそんな気持ちを中心に抱いていない様子だ。
というか、本当にポートルェイルの人間たちとは根本から考えが違う気がした。

「いいんだな。本当に入るぞ」

「はい、どうぞ。いらっしやいませ！」

タケルは満面の営業スマイルを浮かべて、かわいい獣人と、かわいいハーフェルフの少女たちを迎え入れた。

二人はその不思議な空間に、あいた口がふさがらない。

「「うわー」」

子供のように辺りを見回し、同じ反応をする。

目には星々を輝かせ、展示品に丁寧に目を配らせる。

「トウウェインちゃん、このなか明るいねー」

「はい、しかも涼しいです。それに……」
「清潔だねー」「清潔ですな〜」

冒険者でそれなりに金を持っている彼女たちだが、住む家はことごとく断られ、ぼろの借り屋で暮らしていた。

ポートルレイルの街自体も、一部を除いては小汚い建物ばかり。

そんなところで暮らしていた二人は、目の前の清潔な部屋に感激していた。

「床、つるつるしてて、綺麗」

「はい、壁もつるつるしてて、きれー」

冷たい壁に頬を当て、ハーフェルフのトゥウエインが天に昇る。

「あの、お客様……」

ドン引きのタケルがそばに立っていた。

お客が入るなり感動し、壁に頬を擦り始めたではないか。
変わった客は多いが、今回の客は強者のようだ。

「あつ」急いで頬をはがし、何もなかったように目を泳がせるトゥウエイン。

メヴィーが優しく励まし、二人は冷静にタケルに向き直った。

「す、すごいお店ですね」

あまり屋根のある商店に通ったことのない彼女たちには、基準というものが無いが、それでもここが他とは全く違った店だとわかる。

「ええ、ありがとうございます。昨日来たお客様が変わっていますね。すごく綺麗にしないと文句を言うのですよ。壁も綺麗ですから安心して下さいね」

言われて、また恥ずかしそうに俯くトゥウエイン。

「あ、あの。せっかく入れてくれて悪いんだけどさ。私たち、お金持っていないんだよね」

言いづらいことは先に行っておこうと思った。

それで追い出されたなら、まだ傷は浅い。本当にこの店が気に入ったときには、きっともう言い出せないだろう。

「ええ、構いませんよ」

ニコリと答える店主。

メヴィーは不思議な気分になった。

あまり味わったことない、温かい気分。

「あ、でも私も、トウウエインも金がないという訳じゃないんだ。ちゃんと家には金があるし、商品を買いたい意志だつてある」

「そうですね。もちろん後払い可能ですよ。ていうか、ここはほとんど後払いのお客さまばかりです」

場所が場所なので。

またも明るい笑顔で笑うタケル。

二人は今にも泣きだしそうだった。こんなに優しくされたのが初めてだったからだ。

しかし、これはまだ序盤だと言うことを彼女たち知らない。

「商品を見ていてくださいね。私は奥で今日の料理を用意してきましたので」

店の奥へと消えるタケル。

店番は誰もいなくなった。

メヴィーとトウウエインは三度目の、お互いの顔を見合った。

いよいよこの店主は優しいのではなく、バカなんじゃないかと思えてくる。

「メヴィー、あの人おかしいんじゃない……」

言っちゃった！

「ま、まあ、でも良くしてくれているし。それに、アタシこんな店に来たの初めてだから、商品を見てみたいな」

トウウエインが帰りたいたいと言い出す前に、自分の一番強い思いをぶつけてみた。

「うん！私も！」

自然と上がる口角、二人の気持ちは同じだった。

年頃の女の子がするように、お店の壁や棚に入った商品を見て回る。不思議なものばかりで、胸が躍った。

本当に初めてだった。心の底からショッピングを楽しむことができると。なんて。

二人は同じところで立ち止まった。

棚に入れられているのは、パールックのTシャツだった。

片方の服に、それぞれ片割れの花が描かれている。

二人で着て、横に並ぶことでそろそろ花の絵だ。

「これ一緒に着ようよ！」

「うん！」

二人はTシャツを手に取り、その素材の柔らかさに再度驚く。

またお互いの顔を見て、笑いが自然と起こる。

（ああ、なんて楽しんだろう）

心には花が咲いている気分だった。

「おや、それが気に入りましたか。よかったですよ」

喜ぶ二人に後ろに、料理を手にした店主がいた。

なんだか可愛らしい料理を持っているが、それよりも

「その、タダというのは流石に心苦しいので、次来たときに必ず払

います」

「いや、それ全然売れなかったので、喜んでいる二人に貰ってもらうほうが、私としても嬉しいんですよ」

「でも、こないだ素材なのに」

「いいんですよ。本当に。それに、うちは結構お金を落とすお客が一定数いるので、純粹に楽しんでくれる二人のようなお客は珍しいですし」

そついうなら……、貰っておこう！

キャツキャツ飛び跳ねたい気分だったが、知らない男の前でさすがにそれは憚られる。

「Ｔシャツはカウンターのの上に置いておいてください。包装しておきますので。それより、先にご飯にしましょう」

休憩室に案内された二人は、ソファアの柔らかさに再度感動する。そして、目の前に置かれる料理。

「ピッツアです」

「ピッツアああ」

釣られる二人。

目の前の丸っこい生地の上に、色とりどりの素材が乗せられた魅力的な食べ物。

見ているだけで既に幸せだった。

「これで切り分けてください」

そう言つて、店主のタケルは去った。放任主義な男のようだ。

渡されたのは拷問器具のようなものだった。ギザギザになった丸い歯が回転して、押し付けたらパンくらいならキレそうだと思った。それをピッツアというものに押し付ける。

触感パンに近い、たしかにこの拷問器具で切り分けることができ

た。

取り敢えず半分にして、片方をトウウエイナイ渡す。

「大きいねえ」

「そうね。ワクワクしちゃう」

ピッツアを細かく切り分けないので、とんでもなく不便な食べ方を
するしかなくなった彼女たちは、具をこぼさないように端から大口
で嚙り付いた。

しつこく付いてくるチーズ。

漏れ出すトマトの汁。

ぱっさばさに散らかる生地の間。

もうテーブルはひどいことになっていた。

それでも下が見えない彼女たちは、しつこいチーズに苦戦しながら
も続きを食べていく。

そんなに苦労しても食べ続けたいほどに、ピッツアは美味かった。
焼きたてほやほやで、いろんな素材のいい香りがする。

特にトマトが上手かった。

トマトがこの料理の命だと二人は確信する。さらに手が加速して、
二人は全てを平らげた。

食べ終わると、少しだけむなしさが残った。

もう終わったのかと。そして気が付く、大変な状態のテーブルに。
説明しないタケルが悪いが、二人はもうピッツアの余韻どころでは
なくなった。

急いでどうにかしなくては。

しかし、すぐにタケルがやってきた。

「す、すみせん！テーブルめちゃくちゃにして！」

「いいんですよ。それよりも、美味しかったですか？」

「はい！とつても！」

「それはよかった」

タケルに嫌われることもなく、二人は食後のお手拭きまで貰った。致せり尽くせりで、この人には頭が上がらないと思えた。

二人は最後に、丁寧に包装されたTシャツを受け取る。

店を立ち去る際に、メヴィーは今一番聞きたいことを聞いた。

「あの……」

「はい」

「トウウェインとまた二人で、ここに来てもいいですか？」

「もちろんですよ」

「ありがとうございます」

帰り道にトウウェインから言われた。

探していた場所が見つかったねと。

場所が場所なので、強盗とか来ます

酒屋『毒へび』には、面の悪い客が多い。

純粹にブサイクが多いのは、店の怪しい内装が彼らを引き寄せせるの
だろうか。

その中に、少数だが本当に悪い面をした人間たちがいる。

ギルドでハント要請も出ている盗賊団『バランティーン』の面々だ。
なぜそんな連中が堂々と酒屋で酒を飲んでいるかと言うと、彼らの
正体がバレていないことに他ならない。

既にテーブルに座り、酒をあおる四人組。

彼らは待つていた。今まで自分たちが盗賊としてやって来られた生
命線ともいえるものを。

ジョッキに注がれた酒を飲み干すこと三杯、四杯目に入ろうかと言
うときに、待ちに待った男がやってきた。

情報屋のケルクという男だ。

体中を灰色のローブで多い、頭や顔にも薄い布を巻き付けている。
目立って仕方がないような怪しい格好だが、本人が一番やりやすい
格好なのでバランティーンノの面々が今更指摘することはない。

それに、この格好は顔を意識させない効果があることを周りは気が
付いていない。彼らとは長い付き合いのはずだが、果たして顔をさ
らけ出した状態のケルクを本人だと気がつける人間が何人いること
か。

「おう、来たな相棒」

4人組の中でも最も大柄な男が、満面の笑みを浮かべて男を招き入

れる。

リーダーであるマスドベという男である。

ゴツゴツした4人の中に、ほっそりとした怪しい男が混ざりこむ。

ここが酒場でなければ、間違いなくカツアゲの現場に見える。

「相棒ではないよ。あくまで仕事上のパートナーだ」

「へっ、堅いことを言いやがる。いいからお前もたまには飲んでい
け」

つきだされる飲みかけのジョッキを男は手のひらを向けて断りを入
れる。

飲みかけとかがありえないだろう、と心でツツコミを入れながら。

「早速だが、仕事の話に入りたい」

布越しでも声が良く通る。酔っぱらっている4人にもはつきりと聞
こえることができた。

「いいぜ。ちょうどいい感じに酔って調子が上がって来たしな」

「それでは話すでしょう。今回の情報はダンジョン内の店について
だ」

目を点にする4人を無視して、ケルクは話し始める。

近頃ポートルレイルで数人が通っている不思議な店があることを。

その店はダンジョン内にあり、通常通るルートでは通らない場所に
ある。

店にたどり着いた者の多くが、偶然と幸運によるものだという。

しかも、その店の中には高価品から、見たことのないような商品ま
で多種多様な商品を取り揃えているとのことだ。

どこで得た情報なのか、見てきたかのように正確に情報を伝えてい

く。これが情報屋の仕事であり、ケルクの腕の良さだった。

「まあお前が言うんだ。嘘はねーだろうが、そんな場所に店があるなんて、とてもじゃねーが想像できないな」

「普通じゃないことに違いはないな」

「で？ダンジョンのどこにあるんだよ。その店はよ」

「一番肝心なところだ。もちろん、ケルクはその場所を知っている。

「竜のダンジョン地下29階。おおよその位置も把握している。地図を描いて渡すからそれを利用してくれ」

「おう。で、今回の取り分は？」

「情報を仕入れるのに苦労した。それに見返りは大きいものを期待できるだろう。半分を貰う」

「半分は多いな。いつも3割だろう」

「それくらい取れ高が大きいと言うことだ。さ、話は終わりだ。成立か、不成立か。どちらだ？」

「もちろん成立だ」

握手を交わし、契約成立だ。

終わるとすぐに酒屋『毒へび』を立ち去るケルク。酒も飲まずに、酒屋を立ち去る真面目な男だ。きつとまたすぐ、次の仕事の情報を仕入れにいくのだろう。

「いいんですか？半分も」

取り残された彼らは、酒を飲み続けながら立ち去った男の話をする。

「いい。確かに今回は大きな山になりそうだからな」

ただし、今回だけ。情報屋の大事さは知っている。

しかし、次からも吹っ掛けてくるようなら付き合いを終わらせることを考えなくてはならないだろう。

それに彼らは徐々に情報屋の希少価値に慣れつつあった。

そういつたときが一番危ないとも知らずに。

最後の一杯を飲み干しながら、マスドベは明日の仕事を思い浮かべる。

ダンジョン内にある店か。

面白そうだ。ガツンとジョッキをテーブルに叩きつけ、明日の仕事に備えて早々に引き上げた。

強盗団にダンジョンの攻略ができるのか。

答えは、強盗団『バランティーン』なら可能だ。

大斧を振り回すリーダーのマスドベは、力任せに魔物を葬っていた。

それは、地下10階層で出てくる竜種にも劣りはしない。

力でのごり押しで、彼らはダンジョンをひたすすむ。

初めてのダンジョンでの夜、それはなかなかスリルなものだった。普段襲う側の彼らが、いつ襲われるかわからない状態で夜を過ごす。体が大きな拒否反応を示した。

その影響が見事に二日目に出る。

足は重く、4人の中に険悪なムードが漂う。

そして、それは赤竜に遭遇して末期を迎える。

ダンジョンに来て、最大の危機がやってきた。

これまでにないパワーと、スピードを持ったその竜に盗賊団は散りぢりになる。

マスドベは決断をした。

自分だけでも生き残ることを。

赤竜の目が仲間に向いている間に、マスドベはダンジョンの通路に

逃げこんだ。

すぐ側にいた手下の一人が、気づいて後を付いてくる。

「頭！あいつらはどうすんだよ！」

「置いていくしかねーだろ！」

二人はそれ以上言葉を交わさず、考えることもやめた。簡単な仕事と思いきや、とんだ魔物お巢窟だ。

二人はその後も魔物に追われながら必死に逃げる。

そして、渡された地図を使うこともなく、生き延びた二人は運よくそこにたどり着いた。

マストベの目の前には、聞いた通りの扉があった。

綺麗な作りで、赤い魔石が嵌められている扉。それがいつのまにか目の前にあるではないか。

「頭、これって……」

「ああ、情報屋が言っていた店だろうな。まさか本当にあるとはな」
ポートルェイルにいた頃には信じていた話が、ダンジョンに潜るにつれて信じられなくなってくる。

なんで竜の住むダンジョンに店なんかがある？

どうやって店を営んでいる？

店主は正気か？

怒りにも近い疑問が頭の中を走り抜けていく。

マストベは力強く扉の取っ手を握り、体を当てて押した。

「うんっ！うっう！んあ！」

押しても押しても開かない。

「なんだ！この固い扉は！」

「頭、引くんじゃないですか？」

その通りだった。頭に血が上りすぎている。

ちよつと憂さ晴らしに扉を壊したくなつた。赤い魔石も気になる。どうせならそれもいただいておこう。

逃げ出すときに、唯一捨てなつた大斧を振りかざす。これで扉を破壊して、同時に店主も脅してやる魂胆だ。

「ふぬっ！」

凄まじい勢いで振り下ろされる斧。

扉に当たると同時に耳をつんざく音がして、腕に衝撃が走つた。

扉に斧が突き立つと思つていたが、見事に跳ね返されて斧と自分に衝撃が全て返つてきた。

斧の刃がこぼれている。まさか、木の扉に負けたのか？

マスドベは混乱しながら、後ろの部下に目をやった。

後ろにいた部下は、どうやらこぼれた刃が側頭部を通過し、危うく死にかけてらしい。

自分より気が動転していた。

最悪だ。

夜は怖いし、竜は強いし。ダンジョンなんてもう来たくない。

もう今日の強盗とかやめたい気分になる。

出来れば家に帰りたい。昨日の飲みが続ぎがしたい。

既にメンバーの半分はいないが……。

「盗るもの盗つて、地上にもどるぞ」

「……はい」

二人は重々しく感じる扉を開いて、店の中に入る。

涼しい空気と、明るい光が漏れてくる。

「いらつしゃいませ！」

黒髪の、細い体をした男が笑顔で声をかけてきた。

なんだあの体は。女かよ。

マスドベは完全に目の前の男を見下していた。

ここは手始めに脅しておくか。目の前の木でできたカウンターに斧を振り下ろそうとしたが、先ほどの記憶がよみがえる。

あの衝撃をすべて返された怖い記憶が。

後ろの部下も咄嗟につかみかかって来て、阻止しにきた。そういえば、彼はもっと怖い思いをしている。

「わかった」

マスドベは今一度大きく息を吸った。常套手段、大声で脅すに変更だ。

「おい！店主！俺たちは客じゃねー！強盗だ！店の中にある金をすべて持ってこい！」

「……」

黙り込むタケル。

「おい！とつとと持ってこいや！！」

「……、はい、わかりました。では休憩室で座ってお待ちください」

左手をさして、タケルが水も自由に飲んでいいですよ、と伝える。

「は？てめー舐めてんのか？」

胸倉を掴んで、眉間にしわを寄せる。これで大抵の相手は心底震えあがる。ダメなら、手を出すまでだ。

「いえ、お金を持ってくるので、その間立っていても座っていても同じです」

「てめ やけに落ち着いてんな」

怯える訳でも、反撃してくるわけでもない店主に不気味さを感じた。それを悟られないように、さらに眉間のしわを濃くする。

「はい。強盗に入られたので、もう打つ手がありません。なら潔くお金を支払おうと思ひまして」

「お、おう……」

相手の態度に、やはり少し押され気味になるマスドベ。

「頭、どうせ逃げられやしねー。大人しく待ってましようぜ」
何よりも疲れている。

確かにそつだ。ここは地下29階。外には仲間を食ったであろう赤竜がいる。

男が反撃してこないと言うことは、腕に覚えがある訳ではなさそう
だ。何しろあの細い体だ。

抵抗されても一向に負ける気がしない。

「いいぜ。大人しく待っていてやるから、あるだけの金を用意しろ」
「はい」

店主のタケルは店の奥へと消えていく。

残った二人は休憩室に行き、ウォーターサーバーから水を注いで飲んでいた。

多くのポートルレイル市民が苦戦するその機会のシステムだが、二人は何なんく水を飲むことに成功した。意外な器用さである。

店の奥へと消えたタケルだが、丁寧に大型のリュックサックにあるだけの金貨、銀貨、銅貨を詰め込んでいた。逃げる訳でもなく、対策をするわけでもない。

それは真面目に、金庫からお金を取り出す。

タケルの胴体の三分の二はあるほどの大きなリュックサック二つ分に、全ての硬貨がおさまる。

今月も結構売り上げたなーと自分を褒めながら、重くなったリュックサックを盗賊たちの元へと運んでいった。

二人は柔らかいソファアの上でリラックスしていた。

追われていた時に相当体力を使っていたので、今にも眠りにつけそ

うだった。

そこへ巨大なバッグを背負って、ジャラジャラと音を鳴らしながらタケルが戻ってきた。

「これが店にあるすべてのお金です」

マスドベは予想外の量に仰天した。

男の体の三分の二はあるバッグの中が、全て硬貨だと言うのだ。

一体何を売っているんだ!?

てか、誰が来るんだ!?

あふれ出す疑問を抑え、まずやるべきことをした。

すぐに中を改めるが、確かにポートルレイルで使われているものだ。

金貨を数枚とって確かめるが、偽物ではない。

一体この男はどうやってこんなに金を貯めていた!?

マスドベは、またもこの男に恐ろしいものを感じる。

「けっ、いい量貯め込んでいるじゃねーか。おい、ここにもう用はない。行くぞ」

自分が一つと、手下に一つバッグを背負わせる。

ズシリと重いが、歩けないほどではない。

魔物と遭遇したら置いて戦えばいい。赤竜と遭遇したら

「おい、あの赤い竜を避ける方法はないか？」

この男なら知っているかもしれないと思い、試しに聞いてみた。

「ありますよ。酒を飲むことです」

「酒だと？」

「はい、お酒です。ワインがありますので、是非飲んでみてください
さい」

サービスの良すぎる店主を警戒した。

自分たちは強盗で、こいつは被害者。あまりに気前がいい。

「先日大漁に買っていたのがありました。どうぞ休憩室にてお飲みください」

男の手にあるワインと言うのは、どうやら葡萄酒のようだ。赤く透き通って、飲まずとも旨さが口に広がる。

「少し飲んでいく」

「それもそうですね」

二人はまたソファアールへと戻る。

グラスに注がれる葡萄酒。いい香りが鼻をつく。

「旨そうだが。まずはお前が飲め」

「ええ、わかりました」

タケルはグラスに自分の分を注ぎ、一口飲み込む。毒味と言う訳だ。

「うん、今年はここ10年最高の出来らしいですからね。やはり美味いですよ」

毒は入っていない。

そう判断して、二人も飲みだした。

確かにうまい。流石はここ10年最高の出来だ。いままでを知らんけど。

二人は注がれるワインを飲みまわった。

途中差し入れられるチーズや、ジャッキーをつまみながら、酒は更に進む。

「久々ですからね。一杯飲ませてやりたいものです」

ぼそりとしたつぶやきだったが、マスドベは聞き逃さなかった。

「ん？なんだあ？」

「いえ、なんでも。あと10本はあるので、いくらでも飲んでいっ

てください」

そう言つてニコリと、いつもと変わらない笑顔を見せるタケル。

二人は本当に10本飲み切つた。

それでも泥酔はしていない。

むしろ調子が良くなつたほどだ。

「ふん。美味かつたぜ。せいぜい次は強盗に入られないように気を
つけな」

「はい。そうします」

笑顔の店主に見送られ、二人はその店を出た。

部下が聞いてくる。顔を見られているが、始末しなくて大丈夫かと
心配はいらないだろう。こんなところに住む変人だ。

ポートルレイルには来ないだろうし、何より証拠がない。

二人は大量の金を背負つて、高笑いで帰り道に行く。

行きは辛かつた道だが、帰りは驚くほどに行く先を遮る者がいない。
竜どころか、魔物すら出てこないのだ。

いやに静まり返る、地下29階層。

しかし、その静けさは、とある黒き竜の咆哮によって失われる。

重たいバッグを背負つた二人が、目の前の光景に口を閉ざした。

もはや、リアクションすら取れない。

ほとんど伝説上の竜。地下70層付近に出てくると言われる、黒竜
が目の前にいる。

圧倒的な大きさ、圧倒的な存在感、圧倒的な恐怖。

考えが及ぶ前。二人は気が付くと、真黒な世界にいた。その後は、黒竜と大きなバッグだけがその場に残る。誰もいなくなつた29階層。響き渡る黒竜の咆哮。

黒い竜もそのうち消えていった。

「やれやれ、はた迷惑な人たちでしたね」

慣れた手つきで落ちているバッグを回収するタケル。

「久しぶりの酒は美味しかったですか」

人のプリンには手を出さないでください

「チサト、またお店の方を頼んだよ」

「あい」

相変わらずのジト目で、チサトは必要最低限の返事をする。

タケルは本日遠い場所へと仕入れに行くらしい。どこか、チサトの知らない世界へと。

本日も時給3000円の楽な仕事が始まった。

取り敢えず、携帯を取り出してヤッホーニュースでも眺めながら待つとしよう。

どうせ変な客が来るだろうが、簡単な仕事に変わりはない。

ヤッホーニュースで目を引いた記事を開き、読んでみる。

やる気のない店主代理だが、今日も竜のダンジョンBF29 何でも屋 はオープンする。

タケルを思い続けて早数年。

天才的な両手剣使いのサラリスは、今日もマイペースに市場を闊歩していた。

背負ったバッグには愛用の水筒を。腰には新しく購入した黒竜の素材を使った剣を。

外食の多い彼女が市場に現れるとき、それはダンジョンへと潜るときとの準備であることが多い。

今日もそのつもりだ。何個かドライフルーツを購入し、バッグへと収める。

その間も頭は大好きな店のことばかりを考える。

今日は何を買おうか。そして、何を話そうか。
どれくらい滞在していいのか。なにを食べさせてくれるのか。
一人きりの妄想は膨らむばかりである。

それにしても、ダンジョン地下29階層というのはあまりに不便な場所だ。

サラリスにとって29階層くらい容易に踏破できるレベルだが、なんととってもそこまで一日半もかかる。

化粧もしっかりしておきたいサラリスにとっては、なかなか焦れたい距離だった。

(あーあ、タケルが市場にいたりしないかなあ)

淡い願望を抱いて、次のお店へと向かう。

サラリスは知らない。あと5分待てば、タケルが同じ店を訪れることを……。

サラリスは今日も手土産をもってダンジョンへと潜る。

こんなウキウキな気分でダンジョンへと向かう人間は、彼女と変態の賢者くらいだろう。

今日も今日とて、その華麗な両手剣は正面から竜たちを叩き切る。

周りから見ていると、まるで踊っているかのように。剣舞を仕事とする者が嫉妬してしまうほどに妖艶だ。

その額に汗を掻きながら、一日半の工程を経て彼女は目的地へと着いた。

今日は何を話そうか。

新しく売って貰った剣の斬れ味の良さでも語ろうか。

あの黒竜の素材を使ったと言っていた剣は、この道中で恐ろしいほ

どに威力を発揮した。

軽く、頑丈で、何より素直。

サラリス独自の感性だが、彼女にはしつかりとこの剣の素晴らしさがわかっていた。

そんな剣を格安で譲ってもらったのだ。きちんとお礼も言いたい。

今日の手土産である、ポートルェイルで流行りの『イモもち』を手にして、たどたどしく扉を開く。

漏れてくる涼しい風、明るい光。

いつもと同じカウンター内の椅子には、タケルが いなかった。

「えっ!?!」

サラリスは大いに戸惑った。

この店に通って数年たつが、まさかタケル以外の人物がいるとは思ってもしなかったのだ。

目の前にはジト目の少女が。年は自分よりも下だろう。

口を三角形にしながら、不機嫌そうな顔でこちらを窺っている。

いつも愛想のいいタケルのように、出迎えてはくれない。

戸惑いを感じたのは、チサトとて同じだった。

そもそもここは兄がやっている怪しいお店だという認識を持っていたが、前回マヨラーで野人のような客が来たときに、この店はやはりどこかおかしいと決め込んでいた。

そして、今日も店番を頼まれたときに覚悟をした。

ケチャップ大好きな北京原人がきても驚かないと。

それなのにどうだ。

扉を丁寧に開けて、入って来たのは見目麗しい美女ではないか。

チサトはこの異常事態に、口をとがらせて、警戒の色を示すのであった。

「あ、あの、ここはタケル殿が営んでいるお店ではないのか？」
地下29階にライバル店などあるはずもないし、店主も変わるはずがないが、冷静さを欠いたサラリスはそんなことを聞いた。

しかし、目の前で口を三角形にした少女はなにも答えてくれない。
チサトが人見知りなだけだが、サラリスは無意識に拒否されたと感じた。

対人メンタルの弱い彼女は、もう帰りたいたとさえ思えた。

チサトは無視をしたわけではない。
彼女なりのコミュニケーションの方法がある。

初対面の相手にはこれで充分だ。こんな変な店にくる、変な客ならなおさら。

愛用の手で持ち運べるサイズのホワイトボードを取り出し、チサトは水性のペンで文字を書いていく。
きゅっきゅつと書き終わると、ボードを立ててサラリスに見せる。

『そうですが、なにか？』

喧嘩腰ではないが、喧嘩腰に見えてしまう。これがチサトの欠点でもある。

「い、いや、ではタケル殿は？」

『仕入れに行きました。なにか？』

サラリスはある程度事情を把握した。
そうか、タケルは仕入れに行ったのか。
そして、目の前にいる不思議な少女が店番を頼まれたと。

そして、サラリスはもう一点気が付いていた。
この愛想のない少女だが、目元がある人物にそっくりではないか。
自分が今までよく見てきた男の目元に。そうだ、間違いない。
あれはタケルの妹に違いない。だってそっくりなもの。

一度そう思えば、もう他に考えようもない。そして言葉にしなければならぬほど、気になる。

「もしや、あなたはタケル殿の妹か？」

『はい』

予想は当たっていた。

ならばやることは一つ。外堀を埋めねばならぬ！

こうして、お互いに人づきあいが不得意な二人の掛け合いが始まる。
タケルがいないことで起きた悲劇であり、喜劇だ。

「妹殿。お名前を聞かせていただけませんか？あつ、私の名前はサラリスだ。タケル殿とは数年来の付き合いだ」

そう言われたが、チサトは名乗るべきかどうか悩んだ。

なぜ店に来たこいつは、自分のことを知ろうとしているのか？

客なら店員ではなく、商品に興味を示せ。

怪しい！

『チサトですが、なにか？』

今度のは本当に喧嘩腰な返答だ。

「ああ、チサト殿と申されるのですね。かわいらしいお名前です」

『サンクス』

さつきまで怪しんでいたはずだが、すぐに笑顔になるチサト。

褒められることに弱いのだ。しかし、笑っているのが口元だけなので、なんとも不気味だ。

「今ポートルレイルで流行りの『イモもち』を持って来ているので、良かったら食べてください。モチモチしていて美味しいですよ」「いただきます」

お菓子好きのチサトに遠慮はなかった。貰えるものは貰っておけ。

早速口に運ぶ、もぐもぐと噛んで味を確かめる。とりあえず、毒はなさそうだ。そんな失礼なことを考える。

「どうです？」

「」

「ん？」

サラリスにはわからない概念だ。

『モチモチしていて、やや美味しい』これで理解する。

ほぼ自分と同じ意見だった。流行っているが、特段旨い訳ではない。

しかし、本来あげるはずだったタケルはこういったものが好きなのだ。しかし、本来あげるはずだったタケルはこういったものが好きなのだ。

ポートルレイルで流行っているもの、伝統あるもの、彼はそういったものが凄く好きだった。

だから持ってきたが、妹さんにあげることになった。

そして、結果はぎりぎり合格と言ったところか。

『御馳走してくれたお礼に、なんか持って来てあげる』意外と義理堅いチサト。サラリスが言葉を返す間もなく、そそくさと店の奥へと引っ込んだ。

この行動が早い辺り、兄のタケルそっくりだとサラリスは思う。その人は今どこで、何をしているのだろうか。

ちなみに、タケルは今偶然、奇跡的にサラリスの家の前を通っていた。

神しか知りえない、プチ奇跡である。

戻って来たチサトは、透明なカップに黄色いものが入ったものを手に持っていた。

『冷蔵庫に入っていた、タケルのプリンです。食べて』

よくわからないワードと、よくわからない目の前のものを指すであろうワード。

この黄色いのがプリンと言っただろう。

置いた瞬間にプリンとしたが、それが名前の由来だろうか。

「いや、タケル殿のプリンであろう？私が食べていいの？」

当然の質問だ。堂々と持って来られても、そこは見逃せない。

『もちろん』

謎の自信顔で、チサトは書き切った。

皿まで準備してくれている。スプーンもある。いいのだろうか……、いいよね？

ないより“タケル”のプリンを食べてみたい。

『容器底面の突起を折ったら、すんなりと中身が出るよ』

言われたとおりに突起を折った。

そして容器から皿へと移す。

プルンと中身がさらに移る。なんとも癒される光景だった。

突起を折らなかつたらこうはいかなかつたのだろうか？

形が崩れたりするのか？きつとタケルだったら説明してくれないんだろっなあ、と考えながらスプーンを手を取った。

黄色いプリンは山型になっており、頭の部分は黒っぽい。どこから手を出せばいいのか。頭から崩していくか？それでは下の方に行くと、黄色い部分だけになる。ここは縦にスプーンを入れるべきだ。

結論を言おう。正解だった。

甘く、優しい甘さが口いっぱい広がる。

この感じは、おそらく卵の黄身が入っている。おそらくチーズも少量。

それらが口当たりを良くして、つるんと喉を通り抜ける。しかも、黒い部分は少し苦い味のような。

これが下の甘さを殺すどころか、むしろ引き立てている。なんだこの完成された、天井知らずの至福の甘さは。

自分の持ってきた『イモもち』がただだけ恥ずかしくなってきた。

妹殿はお世辞で美味しいと言ってくれたのかもしれない。

「すごく美味しいです。私が持ってきた『イモもち』なんかよりずっと」

『それは良かった。イモもちもよかったよ。手作り感があった』

妹殿は優しい。サラリスにはそう思えた。

ヒンヤリ甘いプリンはすぐにお腹へと消えていった。少しだけ、心寂しい思いだ。

「チサト殿には世話になったな。ところで、今日も店は営んでいるのだろうか？いい商品があったら見せてほしい」

『はい』

タケルに会いに来たとはいえ、ちゃんと客としても来ている。妹殿の手前だし、下心だけで帰る訳にもいかない。

あくまで、私はただのお客だ。サラリスは冷静に自分の気持ちを落ち着かせて、商品を見ていった。

サラリスが商品を数点買って、そろそろ帰ろうと支度を始める。

今日買ったのは、化粧品数点と、保温弁当箱と言う実に女の子的なものだった。

サラリスにとって、チサトと出会えたのは大きな収穫だった。

今のうちに存在を知れたことは大きい。きっと今後城を攻めるのに役に立つはずだ。

「では私はそろそろ行くでしょう。また来るから、その時もよろしく頼むよ」

『待つて』

ホワイトボードから呼び止めの合図を送る。

チサトにはまだ聞きたいことがあるようだ。

シュツシュと水性のペンがボード上を走る。チサトが聞きたいのはこれだ。

『タケルの女ですか？』

実にストレート。

入って来た時から気になっていたことだが、ようやく聞くことができた。

チサトにとっても、勇気ある質問だった。

「えっ!?!い、いや、あの……、まだ」

シュツシュッと唸りを上げるチサトのペン。

『まだ???』

気になったその一言。

まだということは、そのうちはそうなるんですか？

チサトの無言のプレッシャーがサラリスを襲う。

自分でもなぜ“まだ”なんて言ったのかはわからない。

強がりたかったのか、願望が表にでたのか。

しかし、もう引けない。引きたくもない。

「きつと、そのうち……」

サラリスが顔を真っ赤にして勇気ある一言を言い終えた。後悔はない。そうだ、そんな未来を望んでいるのだ。言葉にするくらいいいじゃないか。

そして、それと同時に今日一番の音を立てながら、チサトが文章を仕上げる。

『キターーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

サラリスが帰って、3時間ほど経った。

ようやくタケルが戻り、チサトのバイトが終了する。

「チサト、今日もありがとだな。これ、今流行りの『イモもち』っ

ていうお菓子だ。よかったら食べて」

「もう食べたからいい」

「えっ!?!」

「あとお兄ちゃんのプリン食べたから」

「なんで!?!」

「お兄ちゃんの女にあげた」

「だれっ!?!?!」

転生者らしいです(前書き)

ちょっとグロイかも

食事中の方は気をつけてください

転生者らしいです

彼がまだ人間だったころ。彼は大学生生活を謳歌していた。

授業はほどほどに受け、学校が終わればバイトへ行く。

週末にはサークル仲間でもバーベキューを。

典型的で、何の面白味もない彼の人生に、ある日変化が起きた。

彼はトラックに轢かれてしまい、異世界へと転生したのだ。

目を開けると薄暗い空間にいた。

暗くて目の前が良く見えない、それ以外に感じることはあまりなかった。

重たい体を立ち上がらせ、彼は道を進んだ。

のろのろと、フラフラと。

すぐに可笑しいと思った。

自分の体じゃないかのような重たさだ。視線を落として体を見る、そこにはボロボロに腐った体があった。

声にならない悲鳴が、彼の体を響き渡る。

気が動転して、しばらくはまともに立つことすらできなかった。

だが、彼は確実に生まれ変わって、そこにいた。

こうして元大学生と言うわずかな記憶を残し、彼は異世界でゾンビへとしての人生を始めた。

体には腐った肉がまとわりつき、骨がむき出しになっている。たまに石に躓くと、目ん玉が飛び出そうになる。

駆け足なんてできるはずもない。全力で走ったときに指が落ちて来やっっていない。

痛覚が死んでいるのが、何よりもの救いだ。

不自由な体、不自由な環境。

こんな理不尽な状況を、彼はひたすら悲観した。

しかし、そんな彼をとあるゾンビが救う。

当てもなくダンジョン内をさまよっていた彼は、自分と同じ魔物であるゾンビと遭遇する。

転生してから初めて出会う自分以外の生物。

当然警戒した。そして、あげくの果てに自分から相手に襲い掛かった。

しかし、相手のゾンビは殴られても抵抗しなかった。耳が落ちたといのに。

痛覚がないからとか、そういうことじゃない。

仲間だから手を出してこないとすぐにわかった。

それ以来、彼はゾンビ先輩と共に過ごすことになる。

ゾンビ先輩がどこからか取ってくる腐敗肉を共に食べる。

見た目はグロイし、ゾンビ先輩も汚いが、腐った肉ほど美味しく食べられた。

ゾンビ先輩は生活面だけでなく、精神面でも彼を救った。

世界で一人ぼっちだった彼が、誰かと一緒にいられることは何より

の幸せだった。

お互いに声帯が死んでいるので、会話はできない。それ以前にゾンビ先輩にそんな知能はなかった。

それでも、一緒にいるだけで良かったのだ。

それだけで、彼は救われていた。

そんな幸せな日もあつという間に終わりを告げる。

冒険者といわれる集団の襲撃。

痛覚のないゾンビでも、火の魔法をくれば灰となる。

胸の魔石が壊れると、絶命することは知っていた。

手ごわい冒険者の集団と遭遇したとき、彼はどうすべきか悩んだ。

戦っても勝てないだろう。しかし、逃げ切れそうにもない。

そんな状況を救ってくれたのも、ゾンビ先輩だった。

ゾンビ先輩は自らを囿にし、彼を逃がしたのだ。

彼は必死で逃げた。ただただ怖かったからだ。

しかし、逃げている途中で気が付いた。

ゾンビ先輩はもう助からないと。

冒険者たちが去った後、彼はその場に戻っていた。

地面に転がる、焼かれたゾンビ先輩。

胸の魔石はとられていた。それは人間界で金になるらしい。

だから、ゾンビ先輩や自分は狙われた。

彼はこの日、カラツカラツの目ん玉から、わずかばかりの涙を流した。

もう自分の人生で泣くことはないだろう。
これ以上水分がないという理由ではない。

彼は強くなることを決意したのだ。

ゾンビ先輩のような優しい男になるため、そのゾンビ先輩を奪った冒険者たちに復習をするため。

こうして、数年後に竜のダンジョンでとある魔物の名前が知れ渡る。

ギルドの掲示板に常時貼られているクエスト。

『ノーライフキング 討伐 報酬金貨1000枚』

彼は竜のダンジョンにおいて、竜と同じレベルで危険視される魔物となっていた。

ゾンビ先輩を思い出さなくなって、どれくらいの日が立つだろうか。
彼は竜のダンジョン地下40層にいた。

長年住んできて、色々とわかって来ていた。

転生したばかりのころ、ゾンビ先輩がまだ生きていたところだ。

彼らはダンジョン地下一階層にいた。

ほとんどの冒険者がスルーする階層で、幸せに暮らしたのだ。彼らなりにだが。

彼らを襲撃したのは、ルーキーの冒険者一団。今はもうこの世にいない冒険者たちだ。

彼がゾンビ先輩の死をきっかけとして強くなろうと決めた時、まず

やったことは地下2階層に降りることだった。

環境を変えたかったし、何よりじっとしていると辛かった。

しかし、幸運にもそれが転機となる。

彼はゾンビであるが、同時に人間の知能も持ち合わせる。

2階層の魔物が、一階層の魔物よりも強力だと言うことにすぐに気が付いた。

しかも、魔物の肉を食うことで、自分の魔力が高まることも知った。

そこからの成長は速い。

基本魔物どうしは、好戦的に戦いあうことをしない。

彼はそこに目をつけ、油断しまくっている上位の魔物を殺しまくった。

殺した後は全て食べつくす。それで強くなれるのだ。

ちなみにだが、肉は腐らせれば腐らせるほど美味しいことにも気が付いた。

あくまでゾンビ界での味覚だ。

魔物を殺し、冒険者を襲う日々。

いつしか、彼の名は知れ渡り、ギルドで指名手配されることになる。

そのころからキツイ生活が始まる。

いつも奇襲していた冒険者たちが、どうしても自分の背をとるようになった。

そういつた魔法があるのだが、当然彼は知らない。

逃げて逃げて逃げ回る日々。

ある日、追いかけてきた冒険者に見覚えがあった。

そうだ、あれはゾンビ先輩を殺した人間ども。

彼は初めて人間と正面から戦うこと決意する。

そして、これがまた転機となる。

彼は復習を遂げるとともに、自分の強さを思い知っていた。
数年にわたり積み上げてきたものは、既に膨大なものとなっていたのだ。

そのころから彼は人間を避けなくなる。

襲いに襲い、いつしか『ノーライフキング』の名を得ることとなる。

腹が減った。

彼は地下40階層でそんなことを考えていた。

上の階層に行くと人間たちがうるさい。

下の階層に行くと竜たちがうるさい。

彼の実力からして、40階層が一番住みやすかった。

そんな40階層では、緑竜が住んでいる。

体の鱗に植物を生やした聖なる竜だ。

これが、実にうまい。

しかし、もう何頭も食べてきた。

流石にゾンビといえども、飽きはくる。

そこで、彼の今日の気分だが、刺激の強い赤竜が食べたくなった。なんでも最近赤竜の亜種が出現しているとか。

ダンジョン内の情報に詳しい彼は、そのことを知っていた。

どうせならそいつを食ってやろう。

思い立つと、すぐに足を地下30階層へと向けた。

下ること11回。

彼は竜のダンジョン地下29階層まで来ていた。

長いこと歩いたが、いまだに赤竜には出会えていない。

出会いたいときに会えず、会いたくないときに出てくる。竜の嫌なところだった。

下の階層同様に、しらみつぶしに探していく。

広いダンジョン内だ、おおよそで進んでいくが、次第に知らない通路に入っていく。

迷ったら迷ったでいいのだが、なんだか不思議な感じのする場所だった。

そして、先から何か強い魔力を感じる。

いままで味わったことのない感じだった。近づくなと言わんばかりの、強いプレッシャー。

胸がドキドキしていた。心臓はもう破れているが、こんな気持ちはいつ以来だろうか。

その気持ちは、扉の前に着いて、さらに高鳴った。

なんだか、懐かしさを感じる精巧な作りの扉。
立て看板にも、どこか懐かしさを感じる。店はOPENらしい。

何年ぶりだろうか、いや記憶が薄れている今では、もはや数百年ぶりくらいの懐かしさを感じる。

ああ、自分がゾンビだった前を思い出す。

彼は恐る恐る扉を開く。

中から漏れてくる涼しい空気。既に感覚をなくした肌が、なぜだがその風を感じる。

天井の眩しい照明も懐かしい。

そうだ、自分はこの明るい照明の下で勉強をしていた気がする。どうしても思い出せない、遠い昔の記憶。

「……、いらっしやいませ」

目の前には戸惑いの顔を隠しきれない、店主と思われる男がいた。憎たらしい人間のはずが、彼の姿にはどこか懐かしさを感じて、殺す気にはなれなかった。

黒い髪に、黒い瞳。

そうだ、自分もそんな容姿をしていた気がする。

男が手に持っているのは、携帯電話か。

あれも知っている。ずっと忘れていたが、自分も持っていた。時間があればつつついていた。何が楽しい訳でもなく、ただ考えることもせずに使っていたものだ。

全てが懐かしい。この店の中には、自分の記憶を刺激するものばかり

りがあった。

ここにいたい。まだここでやることがある気がする。

目の前の人間は戸惑ったままだが、しばらく居させてもらおうとしよう。

床に座り込み、そっと目を閉じた。

5感のほとんどが死んでいる分、目をつむるといرونなことを感じる。

いまなら思い出せそうだ。自分がゾンビだった前のことを。

自分の世界に入り込んでしばらくすると、目の前に何かを置かれた音がした。

目を開けると、トレーの上に料理が並んでいた。

湯気を立てて、茶色い汁が揺れている。

ああ、知っている。思い出したぞ、これは味噌汁だ。

毎日のように飲んでいた気がする。

ゆっくりと手に取り、口に流し込む。

体中から漏れ出して、味もわからないが、記憶がその味を覚えていた。

出汁が効いていて、体にしみこむ味。彼の記憶で一番おいしかった味が再現される。

次は白い粒がたくさん入った椀を持つ。

これも、もちろん知っている。

ご飯だ。甘い味が口いっぱいに広がる、あの大好きなご飯が目の前にある。

おかずなしで、全て掻きこんだ。

辺りは漏れ出した米と味噌汁で汚れたが、気にしていられるほど冷静ではない。

今はひたすら、この食事に気持ちを向けていたい。

ご飯と、味噌汁を平らげ、残ったメイン料理を見る。

ひき肉をこねて作る、ハンバーグがそこにはある。

腐った肉を好むゾンビには、とてもじゃないが美味しい食べ物には思えない。

しかし、彼はカッサカッサの目を輝かせて、ハンバーグを見ていた。思い出した。

自分が前世で一番好きだった食べ物、ハンバーグだった。

ケチャップを少しかけて食べる、あの昼下がりの日常が頭をよぎる。思い出せそうだ。今なら自分の名前ですら。あと少し、あと少しだ。

きっとこれを食べれば思い出せる。自分のすべてを。ゾンビになる前の、人間のころの自分を。

彼はハンバーグを丁寧に箸で割り、一口一口食べていく。味は悪い。やはりこの体で楽しめる味ではない。

しかし、嬉しさが止まらない。

泣かないと決めたはずなのに、目からは今にも洪水級の涙があふれそうだった。

無我夢中で食べた。

幼い頃の記憶や、成長してからの記憶が次々に頭に飛び込む。

もうあれも思い出した、これもだ。あと知りたいのは自分の名前だけ。
もう出かかっている。
喉まで来ている。
なにか、あと何かがあれば出てくる。いや、きつかけさえいらぬ時間の問題だ。

その時、店主が目の前に飲み水を置いていった。
食後の一杯か。

気の利く男だ。やはり自分と同じ人種だからだろうか、すごく好感に思う。

こいつは殺さないでおこう。

コップを手に取り、水を飲み込んでいく。

ドキリと魔石の辺りが反応した。

それと同時に、彼は名前を思い出した。前世で自分が名乗っていた名前を。

そうだ、俺の名前は、ヤマナ……。

彼の記憶が全て呼び起こされる前に、思考は止まった。

彼の体が崩れ去り、もうこの世にいないからだ。

「あー、びっくりした」

残った魔石を手に取り、タケルは目の前で蒸発した魔物を思い返す。

店の扉が開いて、入ってきたのはポートルで有名な魔物ノーライフキングだったではないか。

魔除けの魔石があるはずなのに、まさか魔物が来るなんて夢にも思
つていなかった。

驚きはその後も続く。

ノーライフキングは何かを懐かしむように辺りを見回し、その後そ
の場に座り込んだ。

どうしようか悩んだタケルは、聖水を飲ませることを思いつく。

しかし、いきなり出しても飲んではいくれないだろう。

ダメもとだが、料理を出したら流れで飲んでくれないだろうかと思
える。

そうして、ノーライフキングはまんまとタケルに討伐された。

報酬の金貨1000枚を得て、タケルはご満悦だ。

ノーライフキングが心の中で、過去の自分を探していた。そんな口
マンチックなことがあったなど、知りもせず。

竜のダンジョン最奥を目指す者たち

ポートルレイルに集まった10名の有志たち。

S級冒険者アーガナスと、その呼び声に応えた9名の選ばれし者たち。

彼らは決起集会を行うため、ポートルレイルで最も高価な宿を貸し切っていた。

その額金貨数百枚。

彼がなぜこんな大枚まではたいて、有志たちと酒を飲み交わしているのか。

彼らは一大決心をして、ここに集っていた。

ことの起こりは3か月前。

現最強冒険者と呼ばれるアーガナスが大々的に広告を出した。

『ダンジョン最奥を目指す者、我と共に来い』

それ以上の言葉はいらす、アーガナスの呼び声に多くの者が応えた。

実に数百名。冒険者が毎日毎日とやってきては、アーガナスに断られた。

ダンジョン最奥を目指すのだ、実力不足の仲間がいると己の命まで危うくなる。

メンバーの選考には細心の注意が必要とされた。

アーガナスはその中から20名ばかりを選び出し、実戦を交えた演習で相性を確かめた。

その20名の中からさらに絞り、とうとうアーガナスを含める10名にまでなった。

そして、これらのメンバーと一緒にダンジョン最奥を目指す面々となる。

「みんな、よくぞ私の夢に呼応してくれた。感謝する。ダンジョン最奥を目指すということの危険性は十分にわかっているはずなのに、それでも集まってくれた皆の勇気を称えたい。今日はこの宿を貸し切っている。思うだけ飲んでくれ。出立は一週間後だ！」

「「「おおっ！」「」」

高級な装飾が施された宿の一番広いフロアで、大きな集団の音が響き渡った。

前衛を務める剣士、後衛のヒーラー、さらには獣人までこのパーティーにはいる。

アーガナスはつまらない差別をする人間ではない。

人種はもちろん、経歴もその選考では考慮しなかった。

なにより信頼できる人物かどうか、彼はそこだけを見分けるようにしていた。

心から信頼でき、実力も満足の出来る9名が集まった。

これなら本当にダンジョン最奥まで行けるのではないか？

アーガナスは楽しく酒を飲みながらも、心の奥底で燃え滾っていた。

パーティーは盛り上がりを見せていた。

みんな顔と名前は知っているようだった。

それもそのはず、みんなポートルレイルでは凄腕の連中だ。

名前くらい、商人をやっていたって知っているような有名人ばかりだ。

そんななか、一人だけ少しだけ話の輪から外れた女性がいた。その女性の立場が、他のメンバーたちとは違うことを考えて、アーガナスはその女性に声をかけた。

「楽しんでるかい？キーラ」

キーラと呼ばれた女性は、アーガナスが自分に気を遣ってくれたことに気が付いた。

王国最強の騎士は、冒険者たちとの会話にいまいち交れないでいた。

「ええ、ステキな宿ですから、十分楽しんでますよ」

その固さがもう楽しんでいない証拠のようなものだと言うことに彼女は気が付いていない。

「はは、嘘でもそう言ってもらえると助かるよ。君を無理に誘ったのは私だからね」

「そんな、嘘だなんて」

うつ、と声が漏れそうになるのを堪えて、キーラはワインを飲み込んだ。

今回の選考で唯一、自分から申し込みをしなかった者、アーガナス自身から声をかけた人がいた。

それが王国最強騎士のキーラだった。

キーラの実力はかねてから知っていた。

しかし、彼女はあくまで騎士。冒険者ではない。

誘う気はなかったが、アーガナスとはある情報を聞き、彼女を誘うことにした。

どうやらキーラは騎士の身でありながら、ダンジョン30階層まで踏破したことがあるそう。しかも単独で。

初めてで、誰の助けもいらずに30層まで行けた彼女の適応力を、アーガナスは高く評価した。

もともと持っている暴力的な実力を考えれば、今回の作戦で大いに戦力として計算できた。

「キーラさんが竜のダンジョンに潜ったことがあると聞いた時は驚きました。それに今回快諾してくださったときも、驚きましたね」「はは、あはははは」

キーラは思い出したくない過去を思い出していた。辛く険しい道のりを。その先にあった天国を。

そもそも、キーラは今回誘われたときに断ろうと思っていた。しかし、王女から「あら、ステキなお誘いですわね。うちのキーラなら間違いなくお役に立てると思いますわ」と言われて、断れない状況になった。

またあのダンジョンに潜るのか。皆はトイレどうしているのだろうか？彼女は聞くに聞けない疑問を抱いていた。

「キーラ殿がいてくれれば、今回のダンジョン最奥への道も現実味を帯びてきますから」

「そうですか。私も一応興味はあります。なにせこの街を支えている竜のダンジョン最奥ですからね。噂では凄にお宝があるとか」

「ええ、そうですね。あくまで噂ですが」

そう、実力をつけた冒険者の多くが、いずれは考えること。

竜のダンジョン最奥には何があるのか。どこから流れたかわからな

い噂では、見たこともないような黄金の山があるとか、永遠の命を与えられるとか、噂はさまざま出回っている。

アーガナスはそんなものに興味はない。

彼は純粹にダンジョン最奥まで踏破したいだけなのだ。

しかし、メンバーの中には少なからずお宝目当ての人物もいる。

名声も金も得た勝ち組冒険者でさえも引き寄せられる竜のダンジョン最奥の魅力。

キーラも騎士の身でありながら、自然とその魅力に引き寄せられていたわけだ。

美味しい酒が彼らを程よく酔わせ、その日はお開きとなった。

後の一週間は各々が自由に過ごす。

自宅でリラックスしてもよし、自分独自の調整があるならそれをしてよし。

時間はある、みなに十分な準備時間は与えた。

アーガナス自身もベストコンディションを当日に持ってきた。

竜のダンジョン入り口に集まる10人の有志たち。

その周りを囲むのは、噂を聞きつけたやじ馬たち。

純粹に今回の作戦を称える者たちや、10名の有志たちの直接的なファンもいたりする。

若き才能たちが見守る中、10人は竜のダンジョンへと向かった。

今更彼らがてこずる魔物はここらにはいない。

竜とて同じだ。

掛け声もなく、完璧な連携をもつと竜を瞬殺していく。

暴力的な強さをもつキーラでさえも、この面々の強さには驚いていた。

全員が早く、強く、攻撃の幅が広い。

キーラはその中に自分も入れることが素直に嬉しかった。

アーガナスは何千回と潜ってきた竜のダンジョンで、今回ほど手こたえを感じたことはない。

メンバーの誰一人として、足手まといはいない。

一人一人が何かのスペシャリストだ。戦闘において選択の幅を与えてくれる。

これならいける。本当に最奥まで行ける。黒竜の強さを知る彼がそこまで思うのは、初めてだった。

アーガナスは高ぶる心を必死に抑えた。

ダンジョン内で用を足す方法は人それぞれだ。

ちなみに、今回のメンバーの一人は土魔法で簡易の便器を作ったりする。

全く気にしないメンバーもいる。

キーラは簡易の便器を借りることにした。

どうしても比べてしまう。

以前使ったあの快適な便器と。

そして、竜のダンジョンBF29に着いたとき、キーラは口を開いた。

「あの、少しいいだろうか」

キーラの呼びかけに、全員が振り返る。

今まで一番口を開かなかった人が自ら口を開いたのだ、当然興味が沸く。

キーラはこの階にある店のことを話そうと思っていた。

今回はトイレを借りるためではない。

前回のお礼と、あの商店にあるものを皆にも見せたいと思ったのだ。

「信じられないような話だが、この階層にお店がある。よかつたら、そこに寄っていかないか？」

こんな発言をした仲間がいたら、普通は幻覚でも見えているのではないかと疑うのが普通だ。

しかし、彼らのなかにそんな人物はいない。

お互いを認め合っているからこそ、相手の発言を大事に聞いた。

「ほお、興味深い話だな。長いこと潜ってきたこのダンジョンにそんなものがあつたなんて」

アーガナスは心底感慨深げに答えた。

「ああ、不思議なお店だよ。店主も気のいい感じの人だ。是非寄ってみてくれ」

満場一致で行くことに決まった。

皆純粹にその店のことが気になって仕方がなかったからだ。

ダンジョン内にお店？

馬鹿か、相当な酔狂な人物なのだろう。

それに、キーラが言うには変わった商品もあるとか。

一行はキーラの記憶をたどり、そのお店の前に着いた。

人工的な扉に、赤い魔石がはめられている。
その魔石に興味を持ったメンバーがいじくりだす。
アーガナスがほどほどに言い残し、店の中に入っていく。

皆が入った瞬間に、自身にかけた魔法が解かれたことに気が付いた。
相当複雑に練り込んだ魔法陣も一瞬にして解かれる。
ありえないと思うが、ありえているのだから仕方がない。

店の中には、満面の笑みで待ち受ける男と、不愛想な少女がいた。

「ようこそ、いらつしゃいませ!」「いらつしゃい」

気持ちのいい挨拶と、面倒くさそうな挨拶が聞こえる。

「こらっチサト、ちゃんとしなさい」

「あい」

アーガナスは店の中の様子に戸惑いを感じていた。
見たことのないものばかり。キーラから聞いていたはずなのに、それでも新鮮な驚きがくる。

「変わったお店ですね」

「ええ、でもいいものを取り揃えております」

黒髪の男が愛想のよい笑顔で応えた。

アーガナスは違和感を覚えていた。

この男と少女は、まるで自分たちを待っていたかのように立っていた。
た。

一体、いつから自分たちの存在を感知していたのだろうか。

「アーガナス様御一行、お待ちしております。今日は皆様のために特別な食事を用意しております。是非食べてみてください。もちろんお代はいただきません」

「それは随分な御厚意だな。少し怪しいのだが」

「いえいえ、皆さんは竜のダンジョン最奥を目指される有志たち。私もそれを望む者ですので、精一杯サポートさせていただきます」
タケルは精一杯の誠意を込めて、気持ちを伝えた。

二人の間に入ったのは、キーラだった。

「以前世話になった者だ。覚えているか？」

「ああ、トイレの……」

タケルが言いきる前にキーラがその口を塞いだ。

「まあいいじゃない。アーガナス、ここは店主の厚意に甘えてみないか。食事を出してくれると言うし、長いこと保存食だと栄養も失われてしまう」

その言葉に、アーガナスも頷くほかなかった。

確かに食事は大事だ。

長いダンジョンの道のりでは、余計に影響が大きい。
しかし、地下29階層でそれほど新鮮なものが出るとも思えなかった。

10人が休憩室に通され、各々がリラックスして待つ。

店主がしばらくして、少女と共に料理を運んできた。

「これは私の国で新年などのおめでたいときに食べる物です。おせち料理と言います。みなさんの成功を祈って、心をこめて作りました」

10人は、目の前に出された色鮮やかな料理に目を輝かせた。

こんなもの、ポートルレイルでもそうそう食べられるものではない。重箱に入った料理を、慣れない手つきで食べていく。

誰一人として、味に文句のある者はいない。全員がそのおいしさ、見た目のよさに心を満たされる。

しかし、アーガナスだけは余りの準備の良さに首をかしげるのだった。

お腹が膨れたあとは、少しばかりの仮眠をとる。

快適な空間で、毛布まで出してくれた。

全力でサポートしてくれるという言葉通り、何から何まで世話になった。

「ありがとう。ここから先は辛い道のりを覚悟していたが、驚くほど体が軽くなった。本当に竜のダンジョンを踏破できる気がして来たよ」

「そうですね。それは良かったです」

店主のタケルと握手を交わす。

次にチサトとも握手しようとするが、断れた。

兄に怒られているが、反省の色は全くない。

アーガナスは苦笑いし、店を後にした。

そこからの道のりは、味わったほどがないくらい快調に進んだ。会心のスピードと、十分な体力。

見えてきた竜のダンジョン最奥への道のり。

全員の目がぎらついてきたころ、彼らは70階層にたどり着いた。

人類はいまだ70回層の壁を突破していない。
それを阻むのが、黒竜。

70階層付近に出現する、規格外の竜だ。

しかし、今の彼らを止められる力はなかった。
彼らの目には自信と、野望が秘められている。

80階層にたどり着くまでに5頭の黒竜と遭遇したが、そのすべてを討伐した。

いままで1頭しか狩られたことのない黒竜を5頭も。彼らはますます自信をつけた。

そんな彼らはまだ知らなかった。

80階層に何がいるのか。

史上初めて80階層まで降りた彼らを、いきなりそれが出迎えた。

広い部屋での、黄金竜の出現。

最強の10人が、その竜の前では手も足も出なかった。

キラをはじめ、多くの者が撤退を提案した。

しかし、夢をあきらめきれないアーガナスが一步だけ退くのが遅れた。

黄金竜の火炎に包まれ、その体と夢は焼き尽くされる。

残った面々も散り散りになりながら、上の層へと離脱していく。

こうして、史上初めて最奥を目指した者たちの旅は終わりを迎えた。

地上に戻った時、多くの者に悲しみと落胆を与えた今回の作戦。

その落胆をもっとも感じているのは、応援していた者でも、参加したキーラ達でもない。

実はもっと落ち込んでいる者がいた。

竜のダンジョン地下100階層、つまりは竜のダンジョン最奥。その最後の一室で、彼は王の台座に座っていた。

タケルは今回の失敗を誰より悲しんでいた。

未だに誰もここまで辿り着かない。

若き才能がつぶれないように、難敵が待つ29階層に出店したが、いまだ最奥まで辿り着ける冒険者はなし。

タケルは少しだけため息をつき、次は50層辺りにもうひとつ入り口のドアを設置しようかと考える。

それで、いつかここまで辿り着く冒険者育つといいのだが。

タケルは台座近くの転移陣から、いつものお店へと飛んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2783dj/>

竜のダンジョンBF29 何でも屋

2016年10月29日15時50分発行